●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 10-7

地域の教育力

目次

要　約 …… 2

はじめに …… 6

1．3つの地域の紹介 …… 7

- 地域の属性 …… 7
- 地域環境 …… 11
- 地域の中の生活行事 …… 14

2．地域の中でどう子どもを育てたいか …… 22

- 自分の子どもはどう育っているか …… 22
- 何を叱るか …… 26
- 他人の子を叱るか …… 28
- 地域のおとなに望むしつけ …… 31

3．学校のあり方をめぐって …… 37

- 遊びの回復のために …… 37
- 学校の手をもっと自由に …… 39
- 学校5日制をどう思うか …… 40

まとめ …… 43

地球社会の子どもたち ㉙
ロサンゼルス―その4　データの解釈 …… 深谷昌志 …… 44

資料1　調査票見本 …… 49

資料2　性別・地域別集計表 …… 57

＊おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

調査レポート
地域の教育力
要約

東京学芸大学教授　深谷和子
目黒区立不動小学校教諭　矢部　崇

1．対象

地域の教育力が低下したと言われるが、その実情はどうなのか。福井県（鯖江市、武生市）、東京（目黒区）、成田市（成田ニュータウン）の3地域を対象に母親調査が行われた。調査が行われたのは、平成2年4月から7月。

2．地域とは

「地域」という言葉のイメージは「同じ学区域」が68%（図3）、また自分の住む地域の教育環境としては、東京、成田は学習塾と児童公園が子どもが自転車で行ける範囲にあり、またニュータウン成田では、開発途上ということもあって、野原や空き地も残されているなどの特色がみられる。しかし、いずれの地域にもおとなの遊び場（盛り場など）は少なく（図6）、母親も自分の教育環境をまあまあと評価している。（図4）

３．地域での行事

どの地域にもお祭りや盆踊りがあり、地域の運動会や掃除などの行事がある（図９、図10）が、東京の母親はどの行事にも消極的な参加しかしていない。古くからある地方都市の福井と新しくできた成田は、それぞれのモチベーションで地域行事に取り組んでいるようである。（図14、図15、表２、図16）

４．子どもへの評価

行儀が悪い、物を大切にしない、などを筆頭に、自分の子どもの問題点を挙げさせると、「外で遊ばない」「友だちが少ない」は、なぜか最下位である。心身の成長のために遊びの果たしている意義について、意識が十分でないのではないか。（図19、図20）

５．子どもを叱るとき

自分の子どもは、とくに危険な行為をしていたときにきびしく叱る。しかし他人の子が地域で同じ行為をしていても、めったに叱らない。（図21～図24、表４）

要　約

6．自分の子にしてほしい注意

自分の子が危ないことをしているときには、他人にきびしく注意してほしいし、その他、他人に迷惑をかけたり、礼儀に反することをしたときには注意してほしいと思っている（図25～図27）。しかし同じことについて、他人の子に注意しようとはしない。（図28、図29）

7．子どもの成長環境を改善するための母親の意見を探る

①遊びの回復のために学校で「始業前に１時間遊ばせること」については、賛成者は86％と圧倒的である。②しかし、学校の手をもっと自由にし、しつけは母親で、という役割分担の例として、アメリカのように「掃除は業者にまかせる」のはどうか、についての母親の意見は反対が圧倒的である。③給食と弁当の選択を日によって子ども（家庭）にまかせることについても、反対は７割を超える（図31）。学校についてのイメージや自分の受けてきた教育体験を大きく変える方向の提言には、抵抗が多いことがわかる。

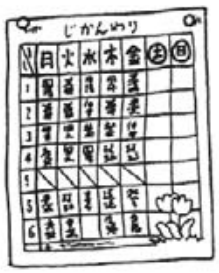
●調査概要

１．調査主題　地域の教育力

２．調査視点　東京都・千葉県・福井県という３つの地域の小学生をもつ母親の目を通して、自然や人間環境を考慮し、「教育力をもつ地域」の姿を探っていく。

３．調査項目　自分の子どもにする注意、知らない子どもにする注意、地域の行事や催しについて、地域の教育環境、地域のイメ

8．学校5日制について



学校5日制については、福井で8割、東京で6割、成田で5割の母親が反対している(図32)。その理由として、子どもはよく遊ぶようになるだろうが、一方で学習塾がはやり、つめ込み勉強が行われることを危惧しているようである。

9．まとめ

母親たちは、地域や他人（学校も含めて）に対して求めるだけで、自分が地域のメンバーとして積極的に教育力をもつ存在になろうとしたり、または「教育力をもつ地域」にしてゆこうとする努力や意識を欠くように思われる。

ージ、学校5日制について、など。

4．調査時期　1990年4月～7月

5．調査対象　福井県鯖江市・武生市（489名）、東京都目黒区(292名)、千葉県成田市（161名）在住の小学4・5・6年生の子どもをもつお母さん942名

6．調査方法　学校通しによる質問紙調査

はじめに

地域の教育力が低下したと言われるようになって、かなりの歳月を経過した。たしかに、「家庭・地域・学校」で構成されていた子どもの生活空間から「地域」が抜け落ち、それに代わる場として、やや次元は異なるものの、マスコミによって伝達される情報の作り出す世界が、子どもたちの心理空間として重要な意味をもつようになった。

かつてそこで遊び、生活し、また「ガキ大将」の言葉が示すように子どもたちの小世界が成立していた「地域」は、いわば学校と家庭の往復のための「通路」になってしまったかのようである。家庭からも学校からも支配されることなく交流していた「地域」の中の上下の幅の大きい異年齢の友人たちは、いま、姿もない。子どもは同学年で同学級、しかも同じ性別の仲間と、か細い交信をするだけになりつつある。

地域が生活の場としての意味を失ったのは子どもの世界だけのできごとではない。都市化と共に女性の社会進出も手伝って、地域の定住層から女性という重要なメンバーを欠くことで、地域は人の住む温かさを失った。農村であれば、それでも高齢者と幼い孫たちという地域定住層の姿が見られるかもしれないが、都市環境では、それらの人びとをいこわせる縁も土もない。地域定住者たちは外には姿を現さず室内のテレビの前にいるだけである。

しかし子どもの成長の場から「地域」を欠いたままで、心も体もすこやかな人間形成が果たされるはずもない。いま地域は、そして地域の自然や人間環境はどうなっているのか。本レポートは、次に紹介する３つの地域を選び、母親たちの目を通してこのテーマに迫ろうとするものである。

調査は平成２年４月～７月。学校を通して母親に調査票を配布、回収した。

1．3つの地域の紹介

地域の属性

対象として選んだ地域は次の3か所である。

A）福井県鯖江市と武生市

北陸の玄関口・福井市に近接するこの2つの市は、人口流動性の少ない静かな地域で、独自の経済圏や文化風土をもっている。都市といっても駅周辺を除けばすぐに広い畑や自然を見ることができる。小京都と呼ぶ人もいる。

B）東京都区内（目黒区）

ＪＲ山手線にほど近く、いわゆる高級住宅地をもその一部に含むが、主要道路が近くを通っており、交通至便な土地でもある。

C）千葉県成田市

千葉県成田市といってもいわゆる成田山を中心に栄えた古くからの町並みと、東京国際空港の開港によって発展したニュータウンの2つの顔がある。本調査の対象とした地域は、ニュータウンと呼ばれる団地の中の小学校区であり、子どもの親はパイロット、整備士など空港関係者、高学歴層の人びとが多い。

これら3つの地域について、もう少しそのようすをみることにする。地域への定着度はどうだろうか。図1、2によると、団地の多い成田は、人びとが移り住んでまだ6年くらいが半数を占め、ほとんどが核家族である。いわゆるニュータウンの典型といってよい。福井は、成田より居住年数が平均で3倍近い。また、祖父母との同居率も高く、核家族率は4割程度である。祖父母の時代からずっとこの地域に住んでいる人も少なくない。東京は、数値的にはこの両市の中間に位置している。しかし、これら地域の人びとのもつ「地域」

のイメージは、図3にあるように、3地域とも、「同じ学区域」が6～7割であり、学校文化の支配は子どもたちの生活の中だけでなく、おとなの意識にも影響を及ぼしていることがわかる。すなわち自分の住む地域のコンセプトが、子どもの学校を中心に捉えられている点に特徴を見いだすことができる。ちなみに母親たちがそれぞれ自分の地域にもっている印象は図4のようになっている。「地域の教育環境がよくないと思うか」の問いに多少とも肯定する母親は2割に過ぎず、また地域差もほとんど見いだされない。3つのタイプの違

図1　居住年数

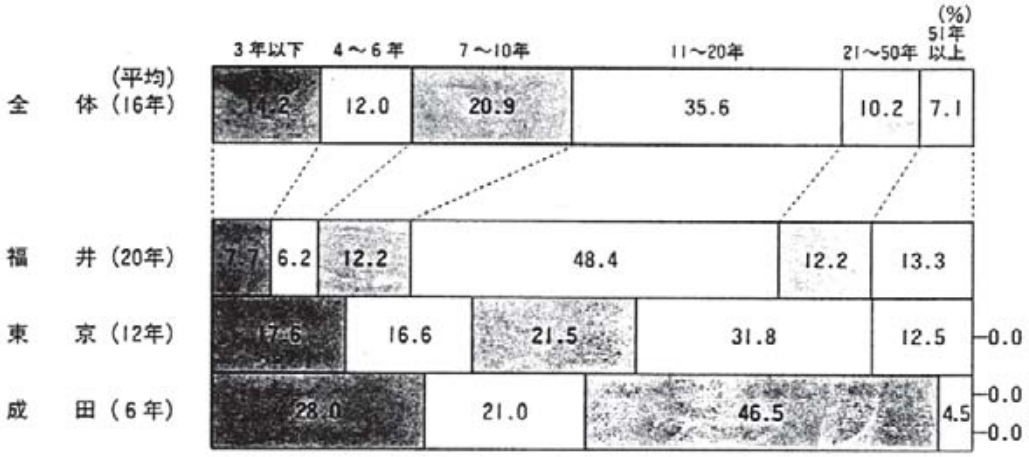
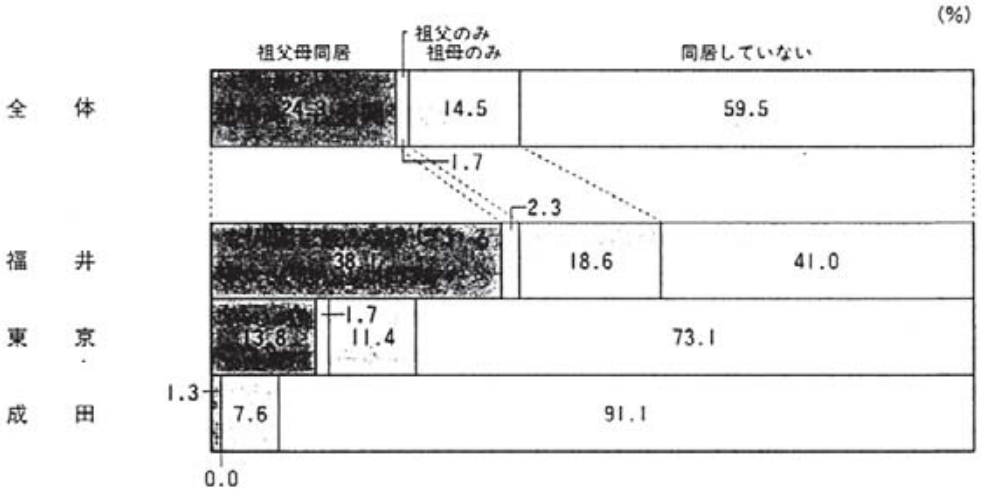


図2　祖父母同居の有無



う地域だが、全体に自分の住む地域におおむね満足していることがわかる。そして「他のお母さんたちと子育てについて意見が度々くい違うか」に対しても3分の2はそう思わないと答えている(図5)。しかし中では福井が他の母親との間に一番共通意識をもっており(68%)、成田が逆に他の人びとと意見の違う自分、を見いだしているようである(55%)。

図3 「地域」という言葉のもつ範囲

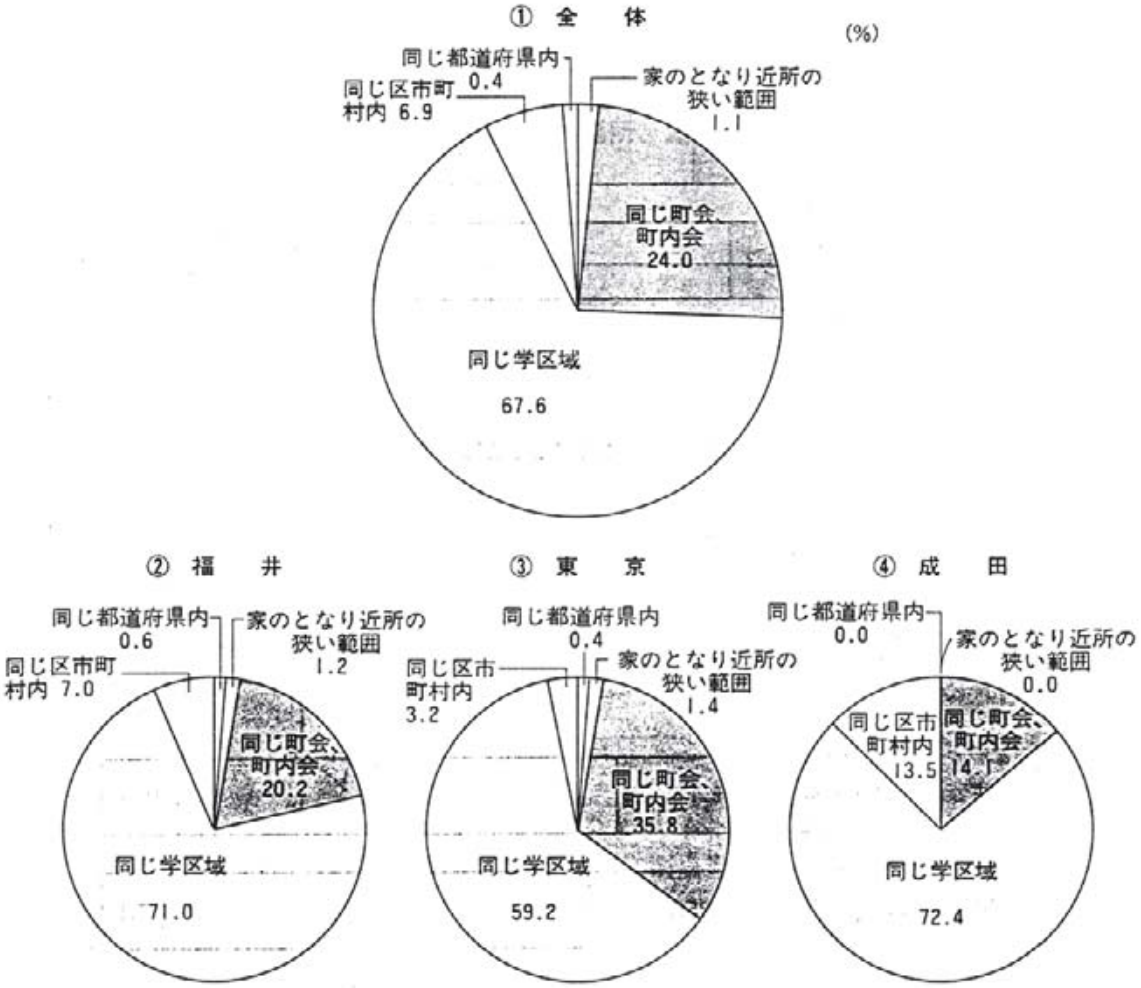


図４　母親の意見「地域の教育環境がよくない」

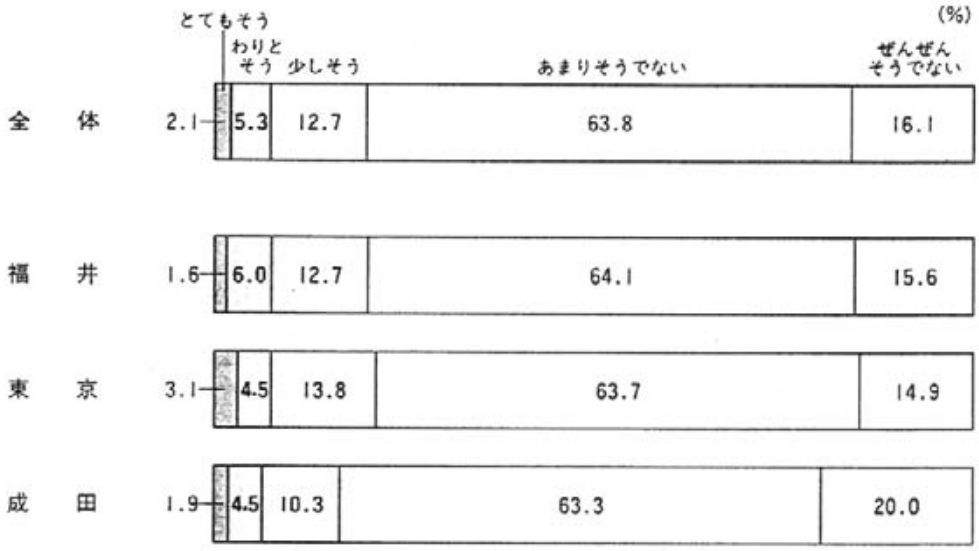
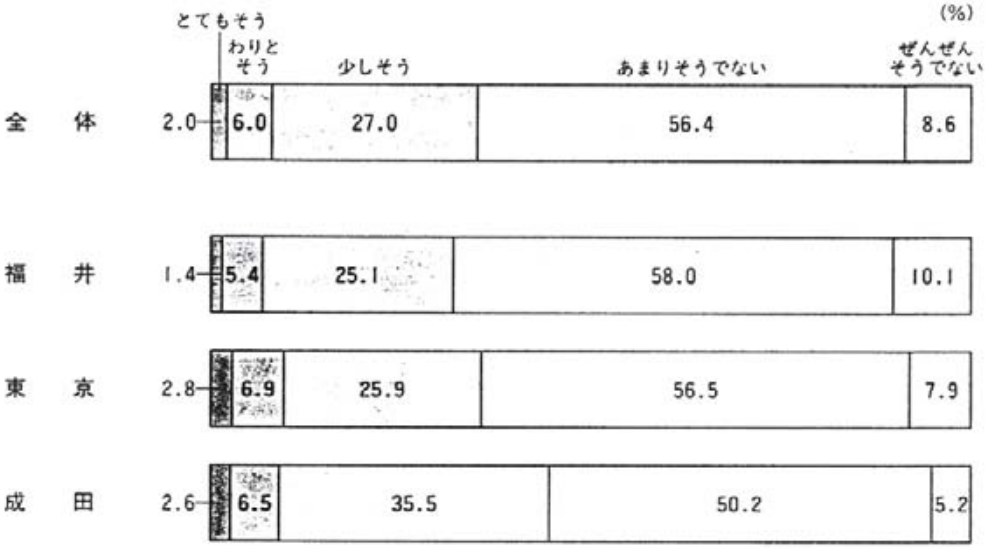


図５　母親の意見「他のお母さんたちと子どもの育て方についての意見が度々くい違う」

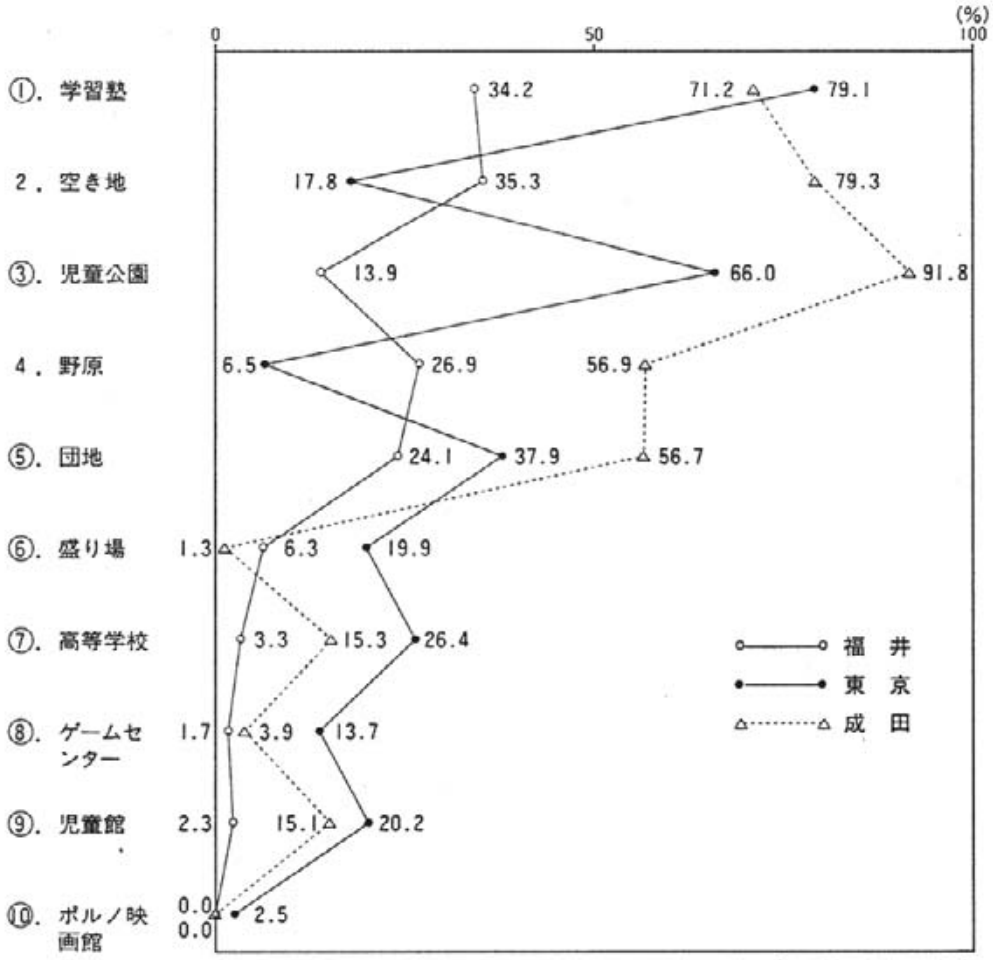


地域環境

さてここで、福井、東京、成田のそれぞれの地域で、自分の家の近く（子どもが自転車で行ける範囲内）の環境をみてみよう。図6は「3か所以上ある」と答えられた割合、表1は逆に「全くない」と答えられた割合をまとめたものである。

両方の数値をまとめてみると、古い地方都市福井は一応子どもの自然の遊び場（野原や空き地）に恵まれているが、成田は開発途上のニュータウンということで、福井より一層周辺に野原や空き地が残されており、かつ児童公園も団地内にしっかり整備されている。

図6　地域にある場所、施設×地域



「3か所以上ある」割合
○印は人工的環境

児童公園しかないかのような東京（東京の場合、空き地は比較的多いが、おそらく地上げ関連で、子どもの遊び場としては不向き、または一時的なものと考えられる）と比べ、また福井のような古くからある地方都市と比べても、意外に成田のようなニュータウンのほうが、今のところ子どもの成長環境として望ましい条件をもっているかに思われる。しかし何年か後を考えると、福井はもっと都市化が進み、成田もさらに開発が進んで野原や空き地が造成の対象となって、双方共に東京化（人工的に作られた児童公園だけが遊び場となり、またよほど住民の意識を高めないと、おとなの遊び場が子どもの生活圏の中に入り込んでくる）してゆくのではなかろうか。

また図7は人びとの望んでいる施設や環境である。子どもの遊び場が何よりも多く望まれているのは予想された結果だが、中で面白いのは学習塾についてのニーズである。図8の母親たちの意見調査の結果では64%が「学習塾にはできるだけ行かせたくない」と言っているが、図7では「ぜったい・できれば（地域の中に）あったほうがよい」が66%となっている。学習塾は多少の抵抗感を残しながらも、今や第二の学校として子どもの生活圏の中に確固とした位置を占めるに至ったようである。

表1　全くない場所、施設

(%)

		福井	東京	成田
子どもの遊び場	野原	26.9	65.5	9.3
	空き地	11.7	34.6	1.3
	児童公園	20.5	1.7	0.0
おとなの遊び場	ポルノ映画館	98.3	85.4	99.4
	盛り場	73.0	44.2	88.4
	ゲームセンター	65.7	33.2	11.0
教育と生活の場	児童館	57.4	11.3	41.4
	団地	9.8	32.4	0.6
	高等学校	74.2	6.3	0.0
	学習塾	6.5	2.1	0.7

図7　地域にあったほうがよい場所、施設

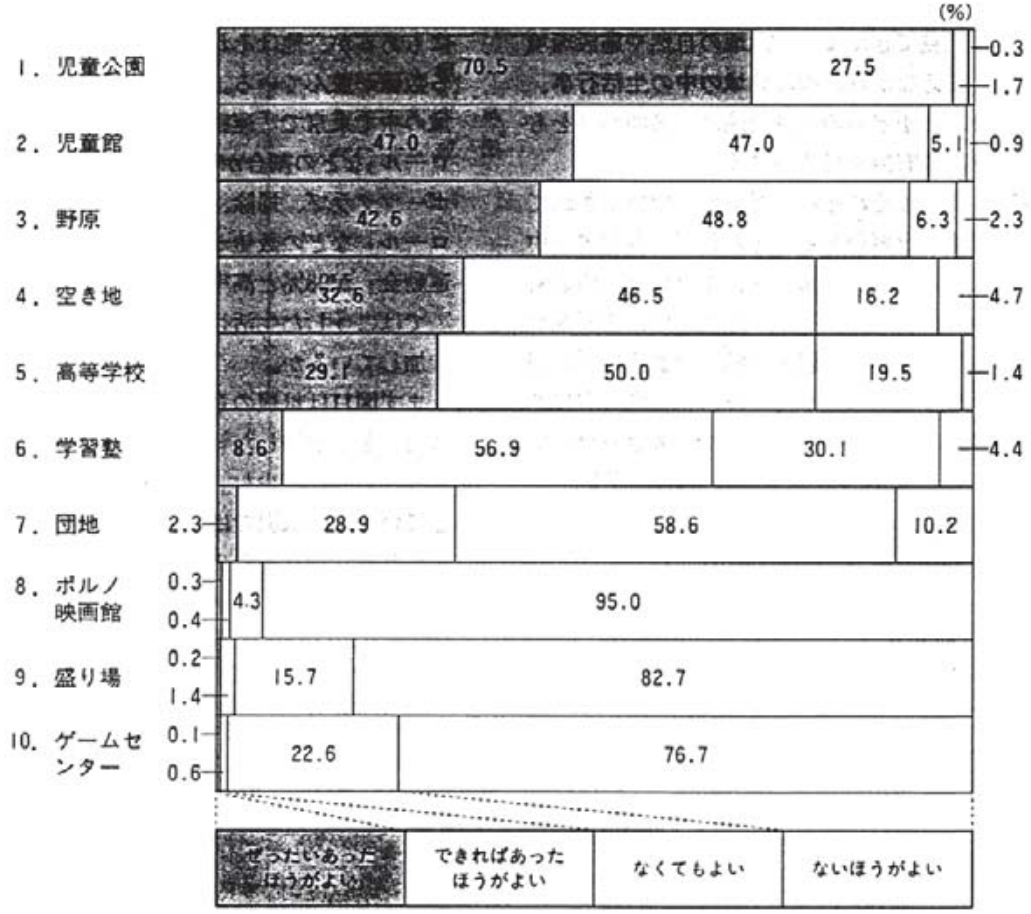
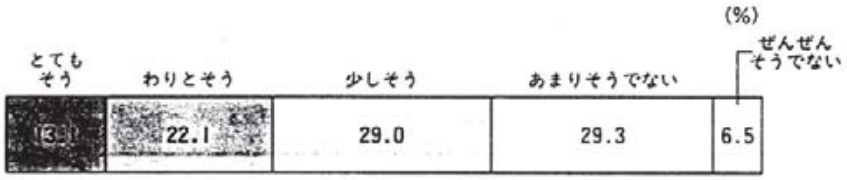


図8　母親の意見「学習塾にはできるだけ行かせたくない」



地域の中の生活行事

以上見てきたような地域の自然や施設環境をふまえながら、次に地域の中の生活行事、すなわち子どもの成長発達に直接関わりをもつ行事の有無を見てゆこう。

地域にはそれぞれの歴史の中で継承されてきた生活行事がある。その行事に参加する中で人びとの交流は深まり、また地域への愛着も作り出される。そうした観点で、まず3つの地域を合わせて図9に示したように「お祭り」から「地域のパトロール」までの有無を調べてみた。「お祭り、運動会、スポーツクラブ」の存在、「子ども会」の存在、「盆踊り」が8割かそれ以上の割合で見いだされる。図10でそれを地域別に示した。「お祭り」はどこにもあるが、他はそれぞれの地域で特色のある数値が並んでいる。全体としては3つの地域の中で東京で「運動会、掃除、地域のパトロール」などの割合が低く、逆に成田には「スポーツクラブ、掃除、子ども会、地域のパトロール」などの数値が高い。福井は「地域の運動会」が98%と高率である。

ではこうした生活行事に母親はどのくらい参加しているか。

まず図11は母親の意見である。「地域の行事にたくさん参加したい」と考える母親は、「とても・わりと・少し」を含めると71%にも達している。地域別では福井、東京、成田の順である。しかし実際の参加経験は図12に示し

図9　地域の行事や催し

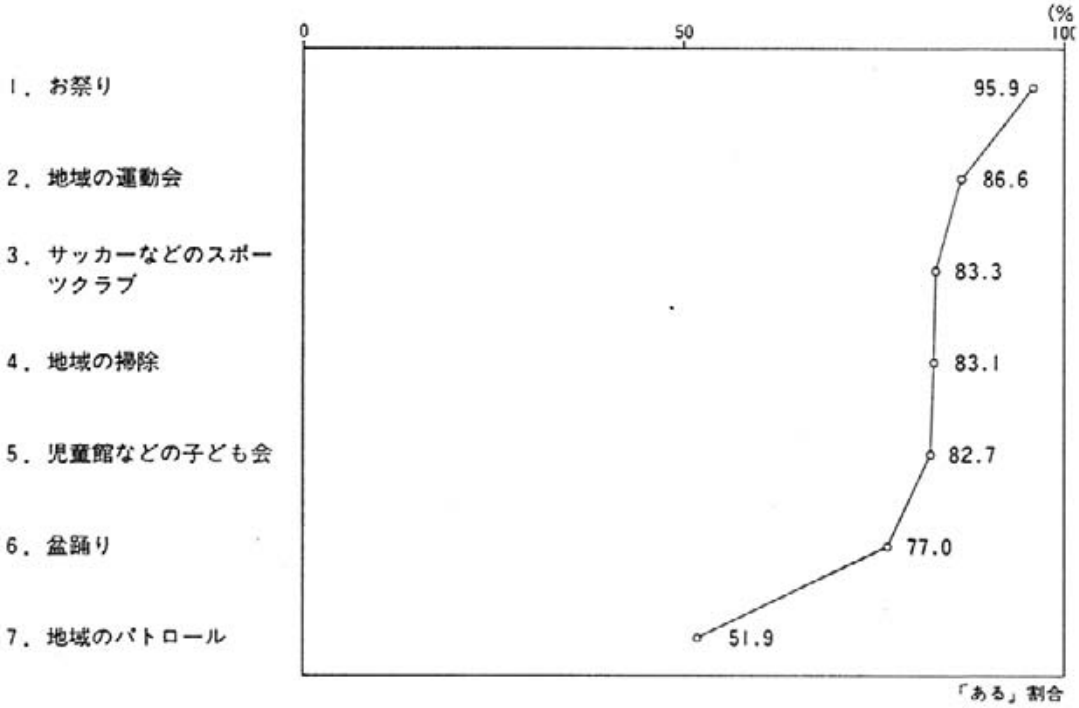


図10　地域の行事や催し×地域

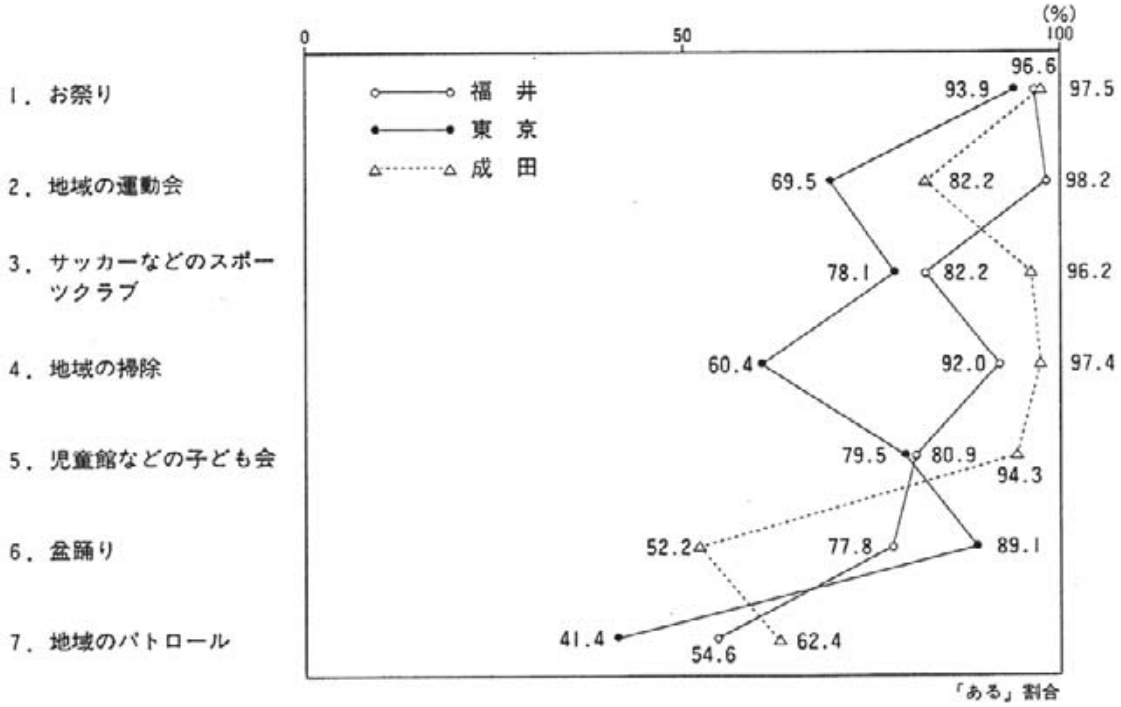
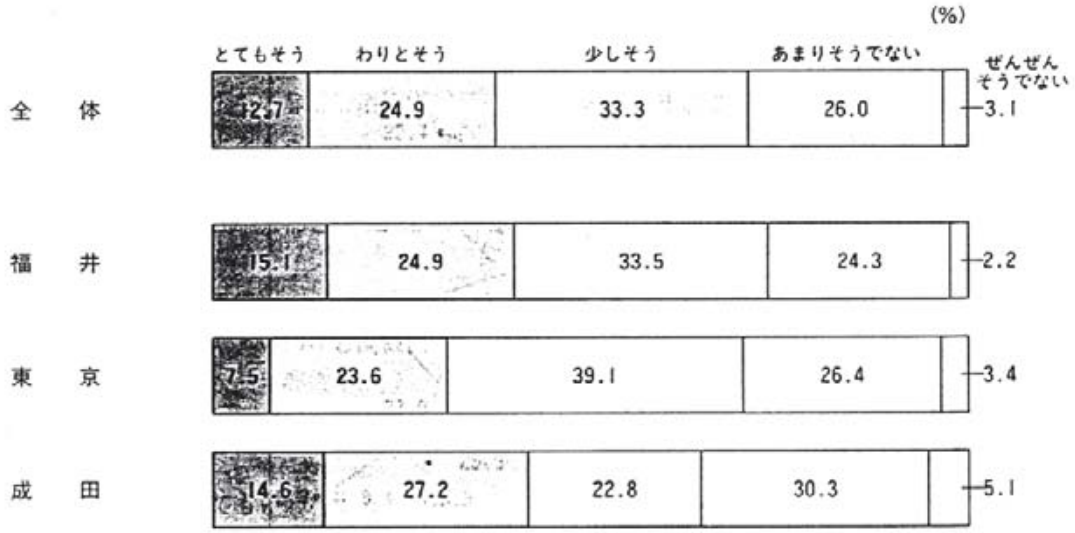


図11　母親の意見「地域の行事にたくさん参加したい」



たように、「何度もある」と答えられている行事は「お祭り、地域の掃除、地域の運動会」が5割、他の行事は3割から1割程度と少ない。さらに地域別のデータ図13を見ると、東京はお祭りと盆踊りなど楽しむためのイベントだけ、福井はお祭りの他に掃除と運動会が突出しており、成田はお祭りの他に掃除と子ども会の参加度が高く、それぞれの地域で特色が見いだされる。

次に図14、15はそれら諸行事への参加の姿勢である。「世話役などで積極的に」「わりと熱心に」「ただ参加しているだけ」「あまり参加していない」に分けると、図が示すように世話役などで積極的に参加した親は行事を問わず少なく1割弱である。「わりと熱心に」を加えても、掃除で44%、運動会で35%程度である。図15によれば、とくに東京の親の熱心度が群を抜いて低いことがわかる。

これをまとめたのが表2である。表右端の積極性指数は、地域の行事や催しに積極的に参加している人が全員の場合を100、積極的に参加している人が1人もなく、全員がただ参加しているだけの場合を0として、参加の積極性を数値化したものである。例えば、積極的に参加した人40人、ただ参加した人10人とすると、その積極性の指数は $\frac{40}{40+10} \times 100 = 80$ となる。この表によると、全ての項目において、積極性に欠けているのが東京である。地域の行事や催しに参加する機会は、多いとは言えないが、決して他の2都市と比べて圧倒的に落ちる数字ではない。言うなれば、参加はするがあまり深く関わらないのが東京の特色なのであろう。

この積極性指数をとり出して、グラフにまとめたのが図16である。一目瞭然、東京の数値が低いことがわかる。また、福井と成田がほぼ同じ図形を描いていることにも注目したい。とくに成田は、新しく入居した人が多い中で、地域のつながりを、これから確立していくものと思われる。そうした地域だからこそ、互いに関わり合う機会をもとうとする姿勢があり、地域のつながりを大切に、自分たちで「地域」を作っていこうという気構えが感じられる結果である。

また図17、18は、そうした行事が地域にあったほうがよいかどうかである。図が示すように「ぜったい必要」とは（「お祭り」の40%から「盆踊り」の18%まで）さほど思われていないが、「できればあったほうがよい」までを含めると、大方の行事が望まれている。しかしすでに見てきたように、参加への積極性が全体に乏しく受け身な点が問題と言えそうだ。

また図18を見ると、こうした行事の必要性は福井の人びとが一番感じており、例によって東京ではほとんどの項目で最小値が示されている。よく指摘されるように大都市の住民は地域の意識が希薄で、むしろ地域に拘束されることを嫌う人びとのようである。

図12　地域の行事や催しに参加した経験

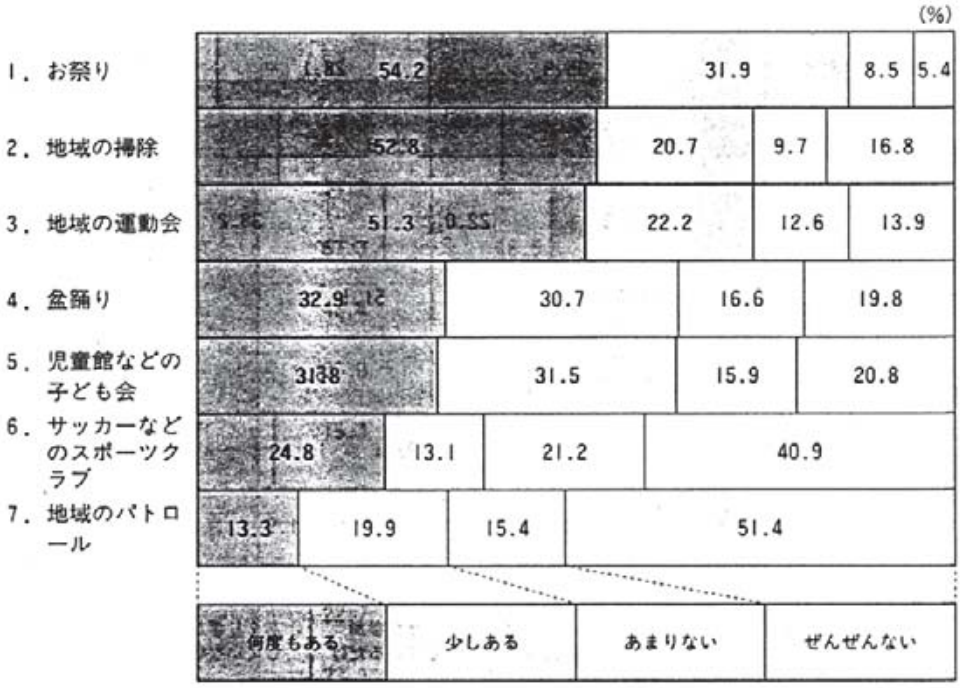


図13　地域の行事や催しに参加した経験×地域

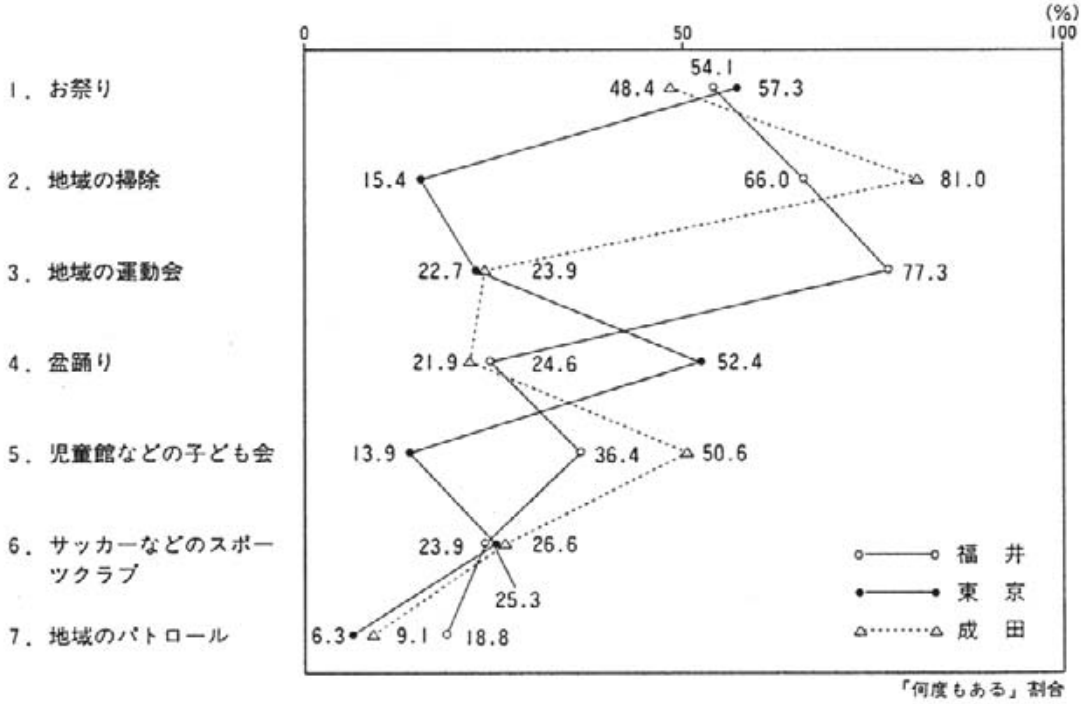


図14　地域の行事や催しへの参加に対する姿勢

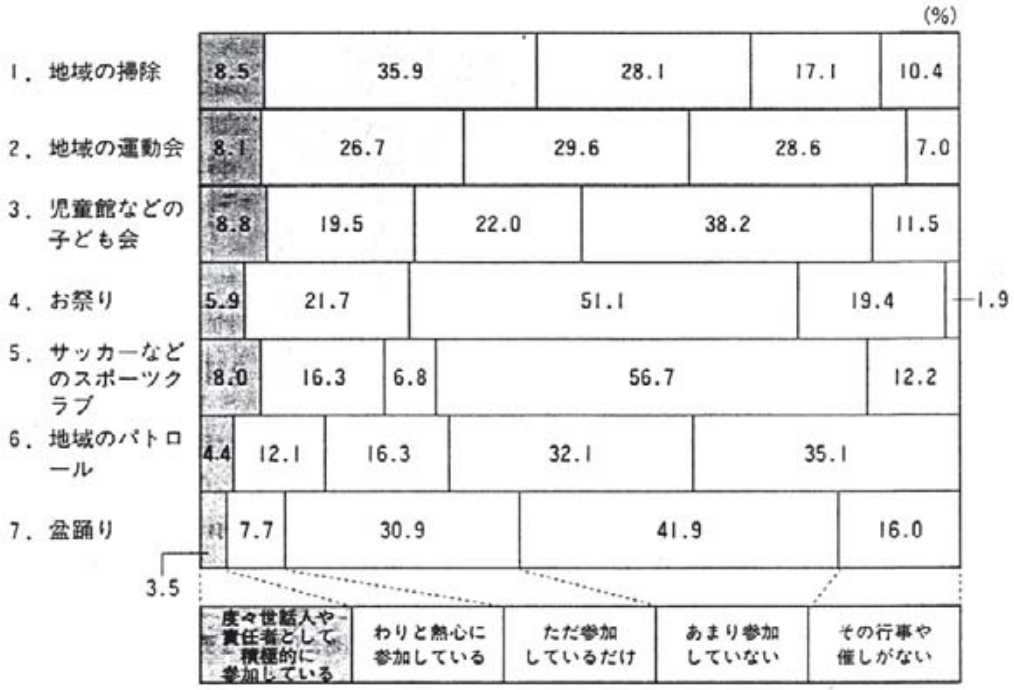
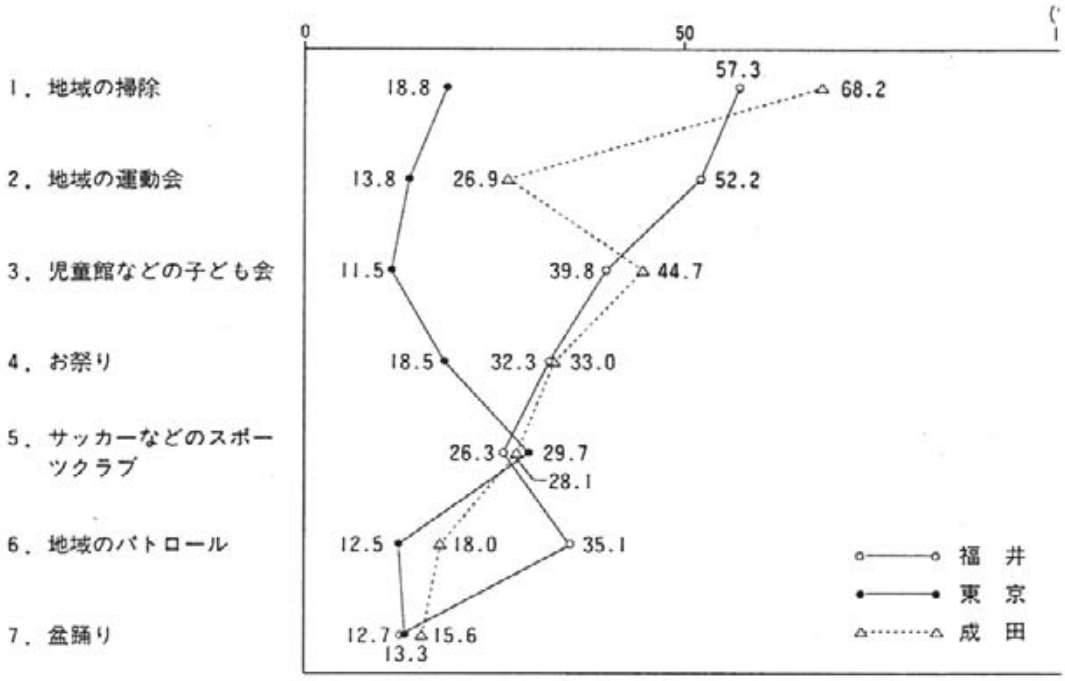


図15　地域の行事や催しへの参加に対する姿勢×地域



「その行事や催しがない」を除いて全体とし
それに対する「積極的＋熱心に参加」の割

表2　地域の行事や催しに参加する積極性①

(%)

		何度も参加した	積極的参加Ⓐ	ただ参加Ⓑ	積極性 Ⓐ/(Ⓐ+Ⓑ)×100
お祭り	福井	54.1	32.3	48.9	39.8
	東京	57.3	18.5	57.5	24.3
	成田	48.4	33.0	45.5	42.0
地域の掃除	福井	66.0	57.3	4.3	93.0
	東京	15.4	18.8	26.4	41.6
	成田	81.0	68.2	0.0	100.0
地域の運動会	福井	77.3	52.2	38.0	57.9
	東京	22.7	13.8	20.8	39.9
	成田	23.9	26.9	18.3	59.5
盆踊り	福井	24.6	12.7	23.3	35.3
	東京	52.4	13.3	49.1	21.3
	成田	21.9	15.6	20.9	42.7
児童館などの子ども会	福井	36.4	39.8	14.1	73.8
	東京	13.9	11.5	11.6	49.8
	成田	50.6	44.7	3.3	93.1
サッカーなどのスポーツクラブ	福井	23.9	26.3	12.8	67.3
	東京	25.3	29.7	15.7	65.4
	成田	26.6	28.1	3.9	87.8
地域のパトロール	福井	18.8	35.1	34.2	50.6
	東京	6.3	12.5	39.9	23.9
	成田	9.1	18.0	29.3	38.1

図16　地域の行事や催しに参加する積極性②

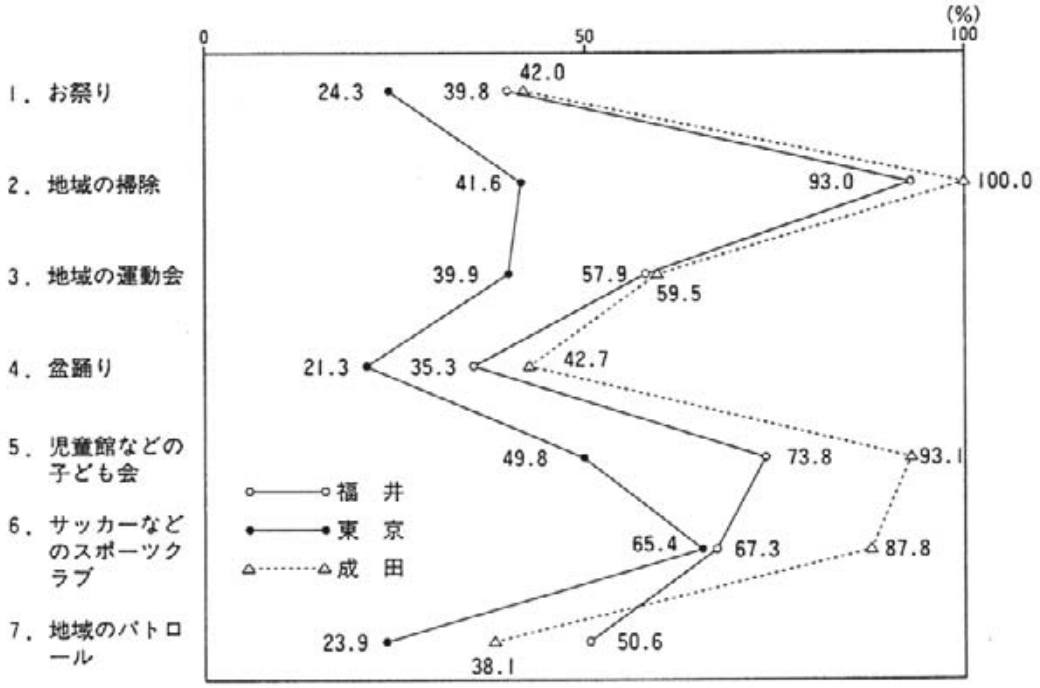


図17　地域の行事や催しはあったほうがよいか

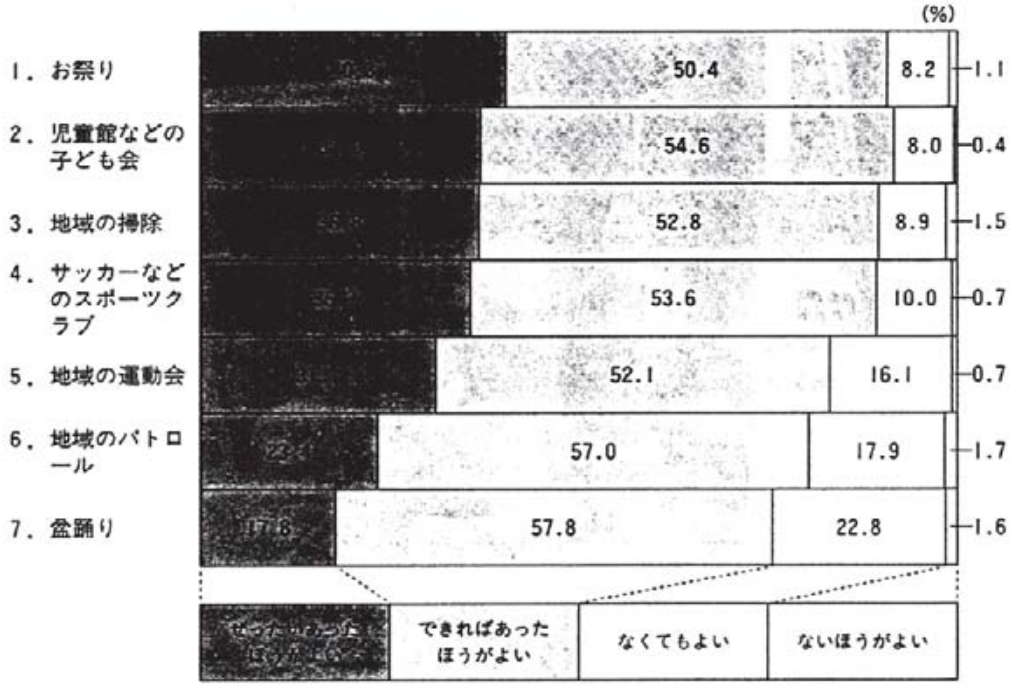
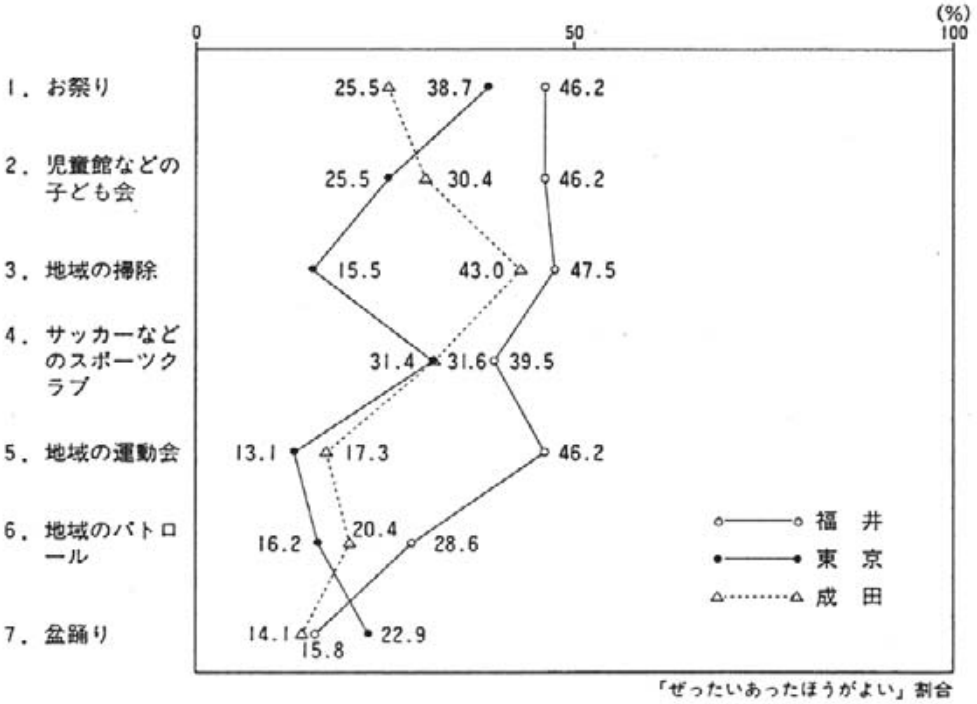


図18　地域の行事や催しはあったほうがよいか×地域



2．地域の中でどう子どもを育てたいか

こうした地域的背景の下で母親は、子どもの教育上どの程度、地域の人びとの関与や影響を望んでいるのか。換言すれば、地域の教育力にどのくらい期待をもっているかを見てゆくことにしよう。

自分の子どもはどう育っているか

図19は自分の子どもの中にどんな問題を感じているかを見たものである。図は「とても・わりと・少し」そう思う順に項目を並べてある。全体としては「行儀が悪い、物を大切にしない、テレビをだらだら見る、言葉づかいが悪い」などいわゆる親との関係で気になる部分、親が扱いに困る部分の問題が上位にきており、われわれが一番心配している「外で遊ばない、友だちが少ない」は最下位。むしろ「あまり・ぜんぜんそう思わない」が7～8割という数値が気になるところである。また図20によると、これは東京よりむしろ福井の親のほうが感じているようである。しかも「家で勉強しない」のは福井が34%であるのに対して、(たぶん福井の子どもたちよりよく勉強させられているであろう) 東京と成田の子のほうが「家で勉強しない」と思われている (福井34%、東京55%、成田58%) のも不思議である。この点は表3にも見ることができる。自分の子どもの成長のスタイル上の問題点を、もう少し適格に捉えてほしいところである。

図19　自分の子どもは……

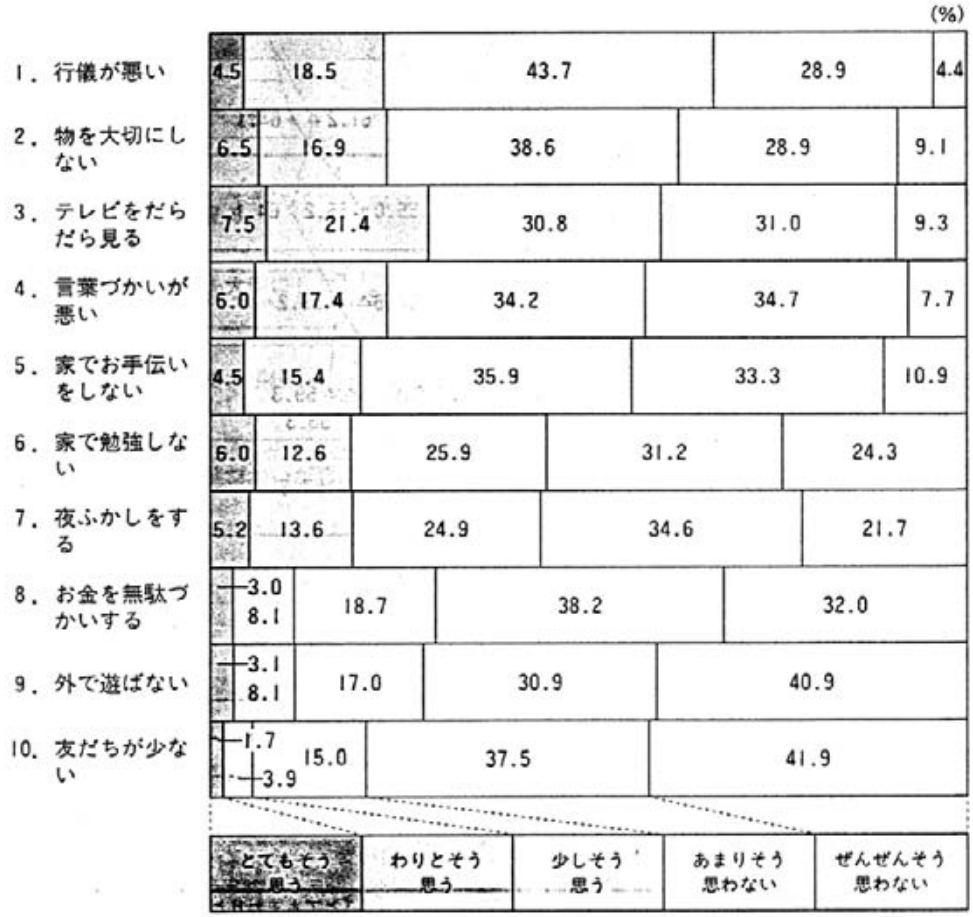

(%)
1．行儀が悪い
4.5
18.5
43.7
28.9
4.4
2．物を大切にしない
6.5
16.9
38.6
28.9
9.1
3．テレビをだらだら見る
7.5
21.4
30.8
31.0
9.3
4．言葉づかいが悪い
6.0
17.4
34.2
34.7
7.7
5．家でお手伝いをしない
4.5
15.4
35.9
33.3
10.9
6．家で勉強しない
6.0
12.6
25.9
31.2
24.3
7．夜ふかしをする
5.2
13.6
24.9
34.6
21.7
8．お金を無駄づかいする
3.0
8.1
18.7
38.2
32.0
9．外で遊ばない
3.1
8.1
17.0
30.9
40.9
10．友だちが少ない
1.7
3.9
15.0
37.5
41.9
とてもそう思う
わりとそう思う
少しそう思う
あまりそう思わない
ぜんぜんそう思わない

図20　自分の子どもは……×地域

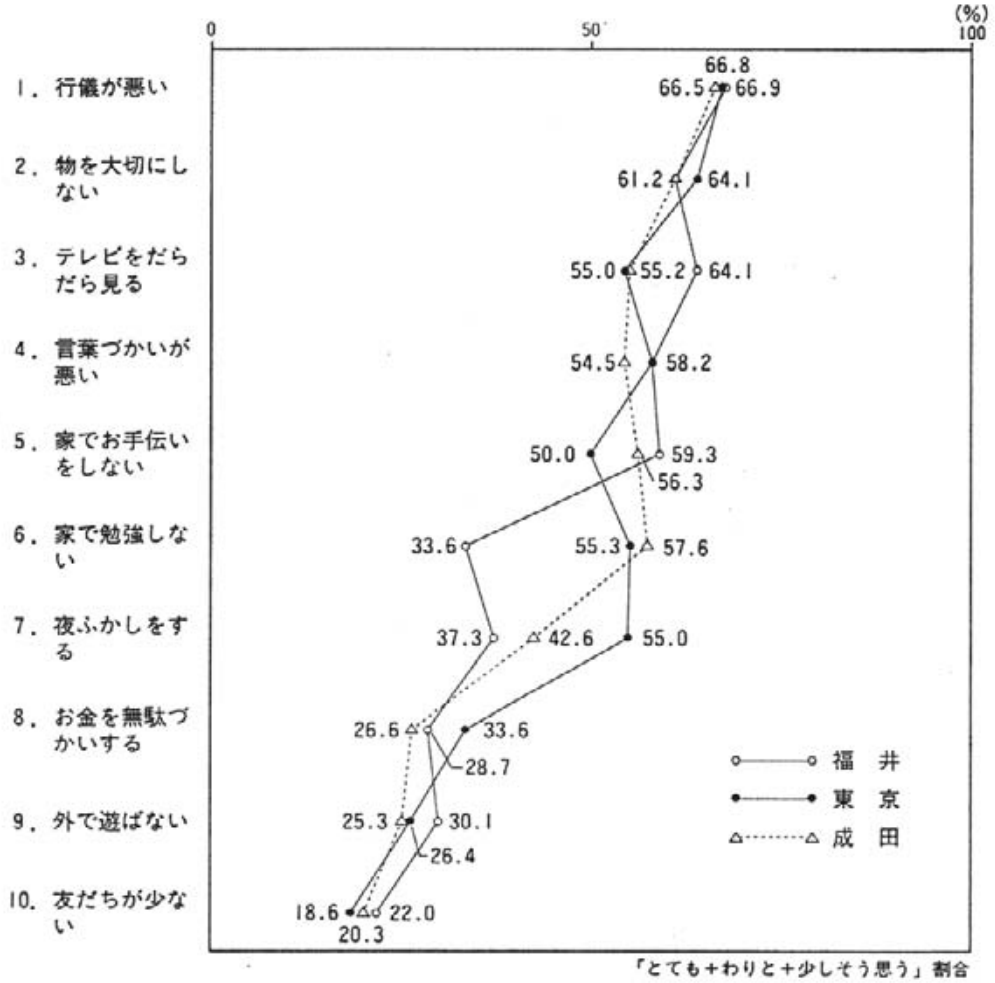


表3　自分の子どもは……地域別ワースト5

(%)

	福井		東京		成田	
1位	行儀が悪い	66.9	行儀が悪い	66.8	行儀が悪い	66.5
2位	テレビをだらだら見る	64.1	物を大切にしない	64.1	物を大切にしない	61.2
3位	物を大切にしない	61.2	言葉づかいが悪い	58.2	家で勉強しない	57.6
4位	家でお手伝いをしない	59.3	家で勉強しない	55.3	家でお手伝いをしない	56.3
5位	言葉づかいが悪い	58.2	夜ふかしをする	55.0	テレビをだらだら見る	55.2

◯印は共通項目
「とても＋わりと＋少しそう思う」割合

何を叱るか

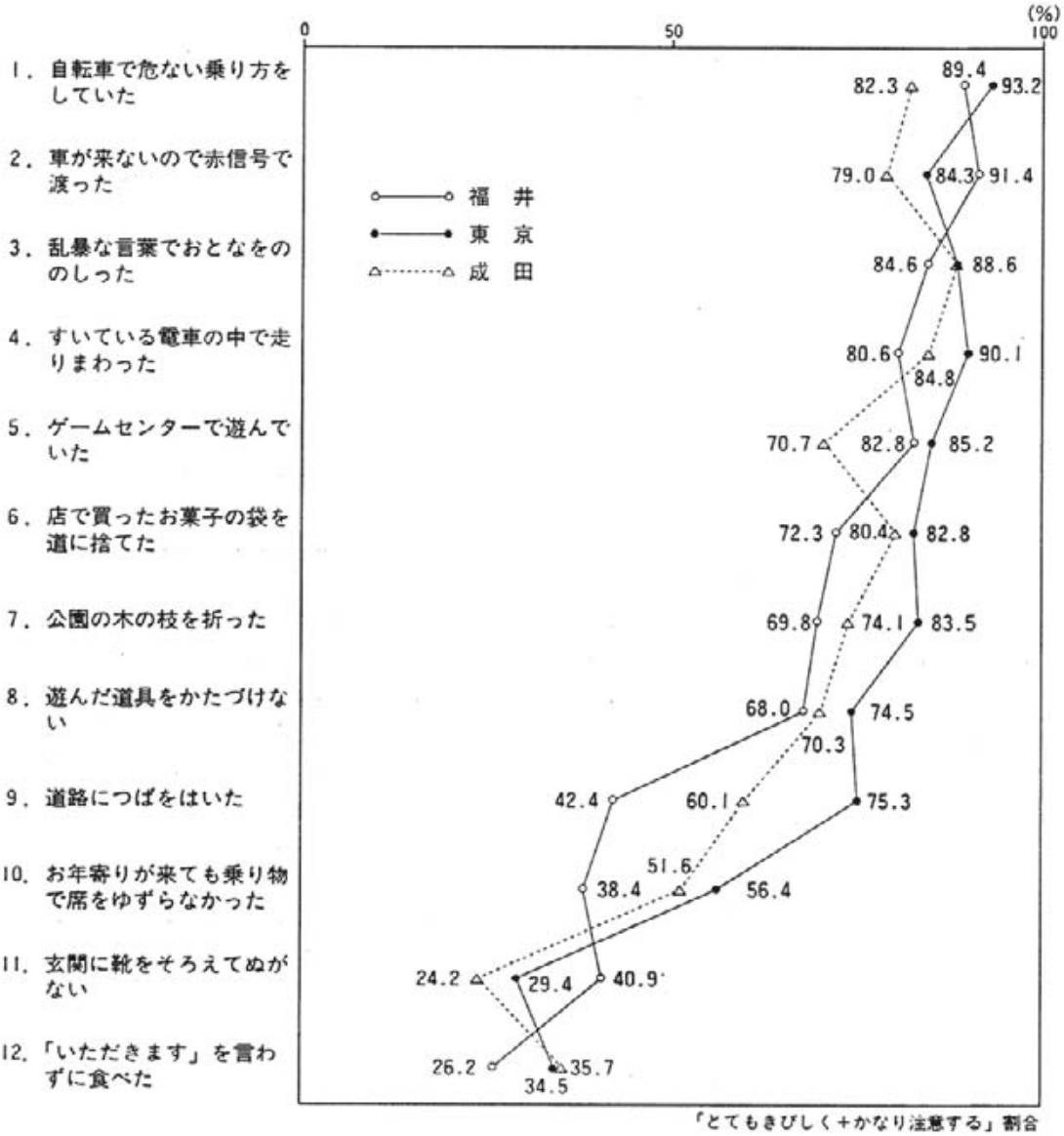
さて次の図21は日常のしつけの内容（自分の子どもに対して）を明らかにしようとしたものである。図は「とてもきびしく・かなり注意する」割合の大小順に並べてある。このうち「とてもきびしく注意する」が5割を超えている項目は、「自転車で危ない乗り方をし

図21　どんなとき、自分の子を注意するか

ていた」(55%)、「車が来ないので赤信号で渡った」(56%)、「乱暴な言葉でおとなをののしった」(50%)であり、上位2つには危険防止が位置し、3位はおとなにとって「不快なこと」がきている。これに対して礼儀のしつけ「いただきますを言わない」「靴をそろえてぬがない」「お年寄りに席をゆずらない」「道につばをはいた」に対してのしつけは甘すぎないだろうか。

しかし全体としては、あらゆる項目に「きびしく」とはいかないまでも「かなり・一応」は注意していることがわかる。図22によると「とてもきびしく・かなり注意する」親は東京に多いことも特徴的である。項目の数としては成田がこれに次いで多く（きびしく）なっている。

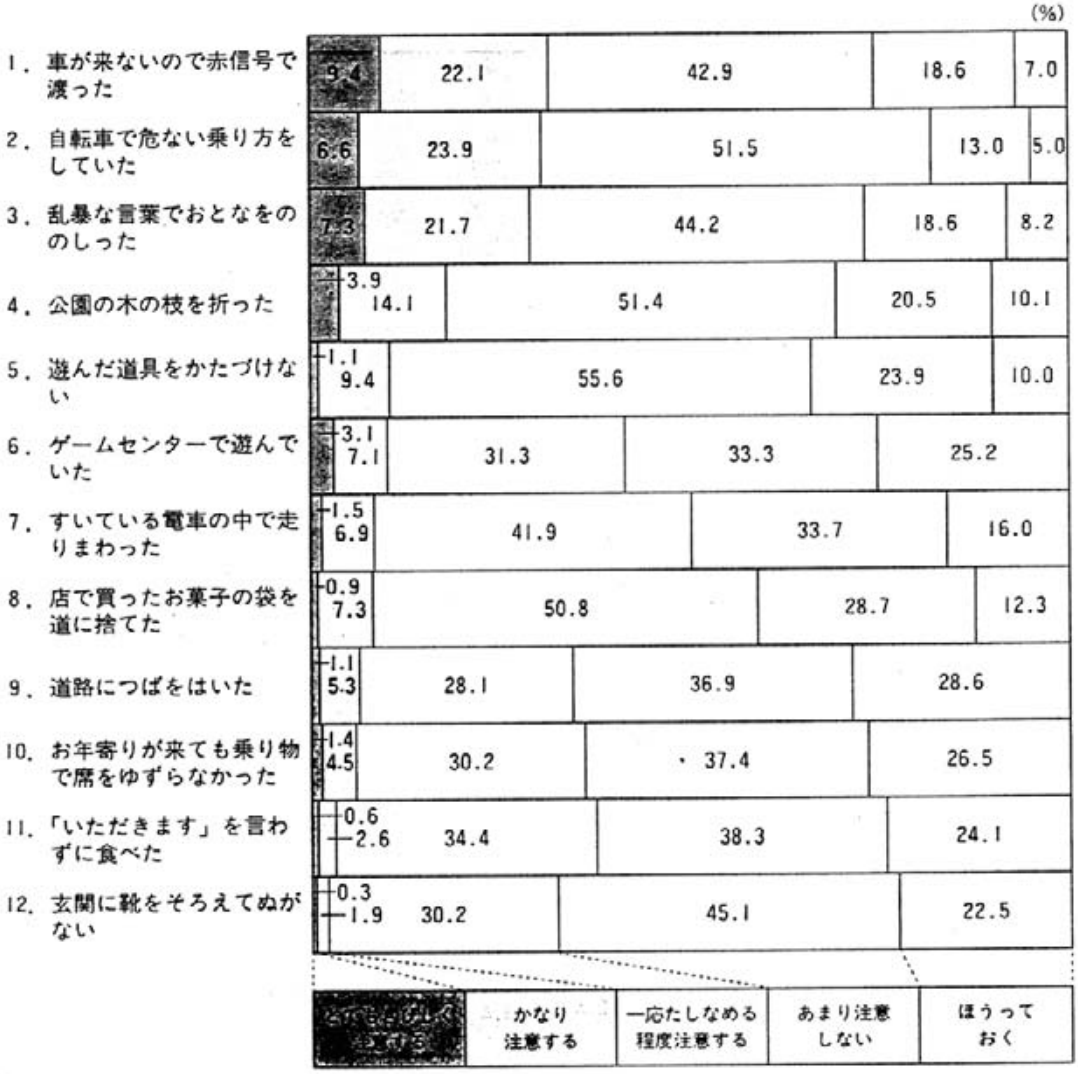
図22　自分の子どもを注意するとき×地域



他人の子を叱るか

では、同じ状況で他人の子がしている行為を見かけたら、母親たちはどう対応するだろう。その結果が図23である。図が示すように、図21で見た「自分の子」の場合とはあまりにも注意の程度が異なっている。他人の子を注意する、まして知らない子だったら注意しに

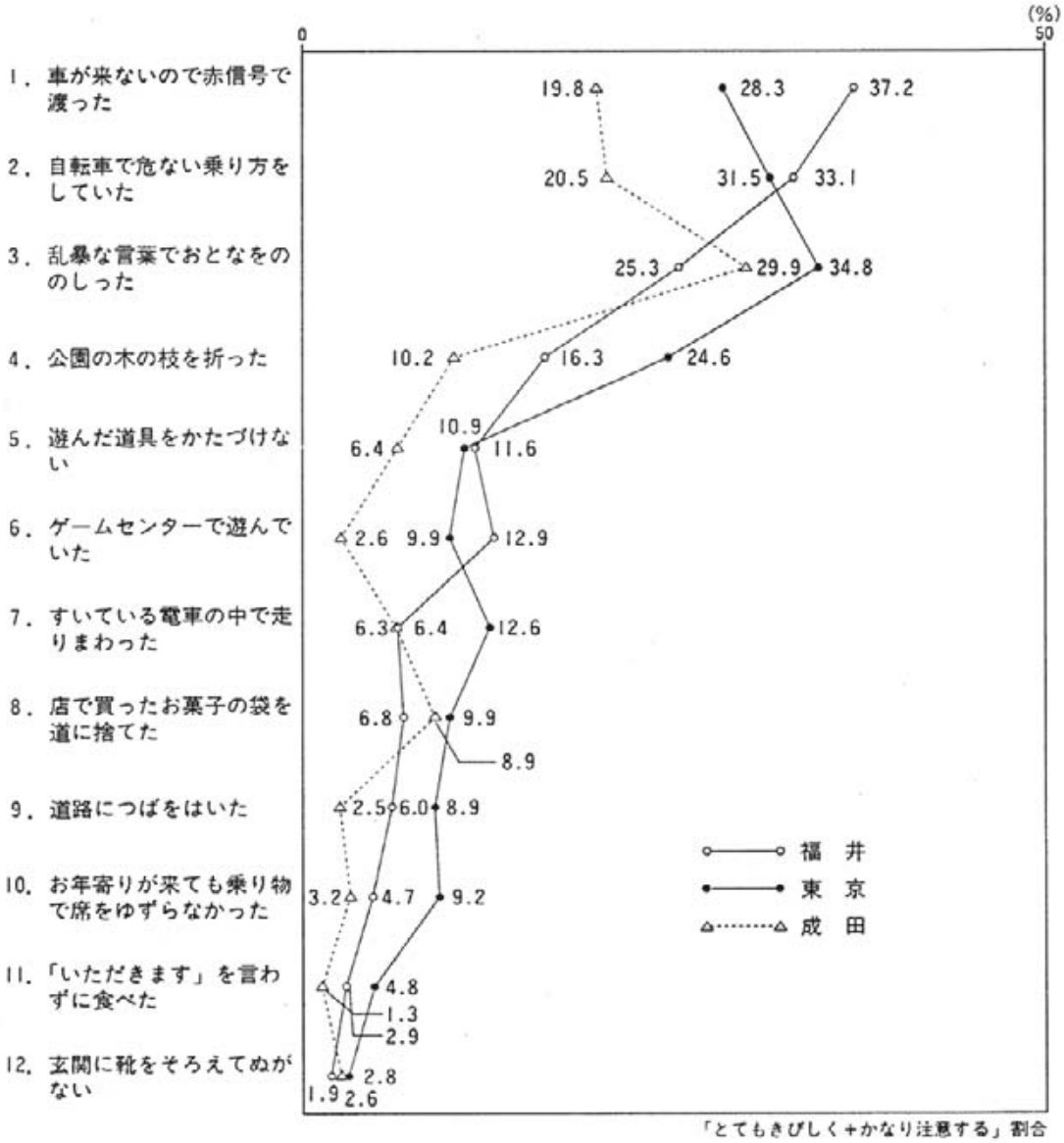
図23　どんなとき、他人の子どもを注意するか



くいというのは当然だろう。しかしそれにしても、「とてもきびしく・かなり注意する」の値が、「車が来ないので赤信号で渡った」(32%)、「自転車で危ない乗り方をしていた」(31%)、「乱暴な言葉でおとなをののしった」(29%) と、自分の子に対する注意のしかたとは極端に違っている。これは実際の場面になればもっと「ほうっておく」に傾くのではなかろうか。

次に図24は地域別の結果である。一番上「車が来ないので赤信号で渡った」に対しては、交通事故が多いはずの東京の母親のほうが福井の母親より注意しないと答えており、ゲームセンターで遊ぶ子にも無関心である。こうした状況に慣れ切っているのだろうか。また全体に成田の母親が他人の子どもに対して無

図24　他人の子どもを注意するとき×地域



関心である。作って6年というニュータウンでは、他人の子どもにまで母親的態度が向けられるほどの住民意識が形成されていないのだろうか。また東京の母親は乱暴な言葉づかいをはじめとして各種のマナーや公衆道徳に関しては、他の地域より注意する者が多いのも特徴である。

図21と図23から、「とてもきびしく・かなり注意する」割合の差を算出し、それを地域間で順位づけたのが表4である。全ての項目について、自分の子どもと他人の子どもにかなりの差をつけて対応するのが3地域とも共通だが、中でも自他の差が少ないのが福井、ややおいて東京と成田である。居住年数が長いほど地域意識が育てられ、地域の子どもへの関心も高まって、このような結果になったものと考えられる。

表4　自分の子どもと、他人の子どもに対する対応の差

(%)

	福　井	東　京	成　田
1. 車が来ないので赤信号で渡った	①54.2	②56.0	③59.2
2. 自転車で危ない乗り方をしていた	①56.3	②61.7	③61.8
3. 乱暴な言葉でおとなをののしった	③59.3	①53.8	②58.7
4. 公園の木の枝を折った	①53.5	②58.9	③63.9
5. 遊んだ道具をかたづけない	①56.4	②63.6	③63.9
6. ゲームセンターで遊んでいた	②69.9	③75.3	①68.1
7. すいている電車の中で走りまわった	①74.2	②77.5	③78.5
8. 店で買ったお菓子の袋を道に捨てた	①65.5	③72.9	②71.5
9. 道路につばをはいた	①36.4	③66.4	②57.6
10. お年寄りが来ても乗り物で席をゆずらなかった	①33.7	②47.2	③48.4
11. いただきますのあいさつをしないで食べた	①23.3	②29.7	③34.4
12. 玄関に靴をそろえてぬがない	③39.0	②26.6	①21.6
平　均	①51.8	③57.5	②57.3

(自分の子－他人の子)の%
(丸数字は横にみた差の少ない順位)

地域のおとなに望むしつけ

次に図25は「自分の子どもが地域でそうした行動をしていたときに、他のおとなからどの程度注意してほしいか」である。これは図21の自分の子にする注意と（多少数値は低くなるものの）似た結果である。両者を合わせて作図したのが図26である。次に地域別の結果が図27である。ここでは東京の母親のほうが福井、成田の母親より多少とも注意を望んでいる。福井では人間関係をはばかって、逆に成田では他人の子への干渉を避ける、という意識からの結果かもしれない。

また図28は図25の「他人から注意してほしい」割合をすでに見てきた図23（他人の子に注意する）の結果と合わせて作図したものである。図が示すように全ての項目で「自分では他人の子に注意しないが、自分の子には注意してほしい」という態度が見いだされ、しかも数値のギャップはどの項目でも極めて大きい。他人の子はしつけようと思わないが自分の子は他人にしっかりしつけてほしい――こうした親たちの住む「地域」がすべての子どもに対して教育力をもつはずがないではないか。

これを先ほどから見ている母親の意見調査の項目から見ると図29のようになる。例によって地域の全体でしつけるべき、という意見には「少し」も含めると87%の母親が同意する。しかし実際の行動はすでに見てきた通りである。

そして図30に示したように、母親の視野には地域の子の姿は入ってきていないかのようである。わが子が外でしていることが気になり(76%)、いけないことをしていればわが子は叱る（82%）し、他人からも注意を望んでいる（97%）が、他人の子だとよほど悪いことをしていない限り、黙って通り過ぎてしまう傾向にある（71%）。

図25　どんなとき、自分の子どもを注意してほしいか

図26　自分の子への注意と他人からしてほしい注意

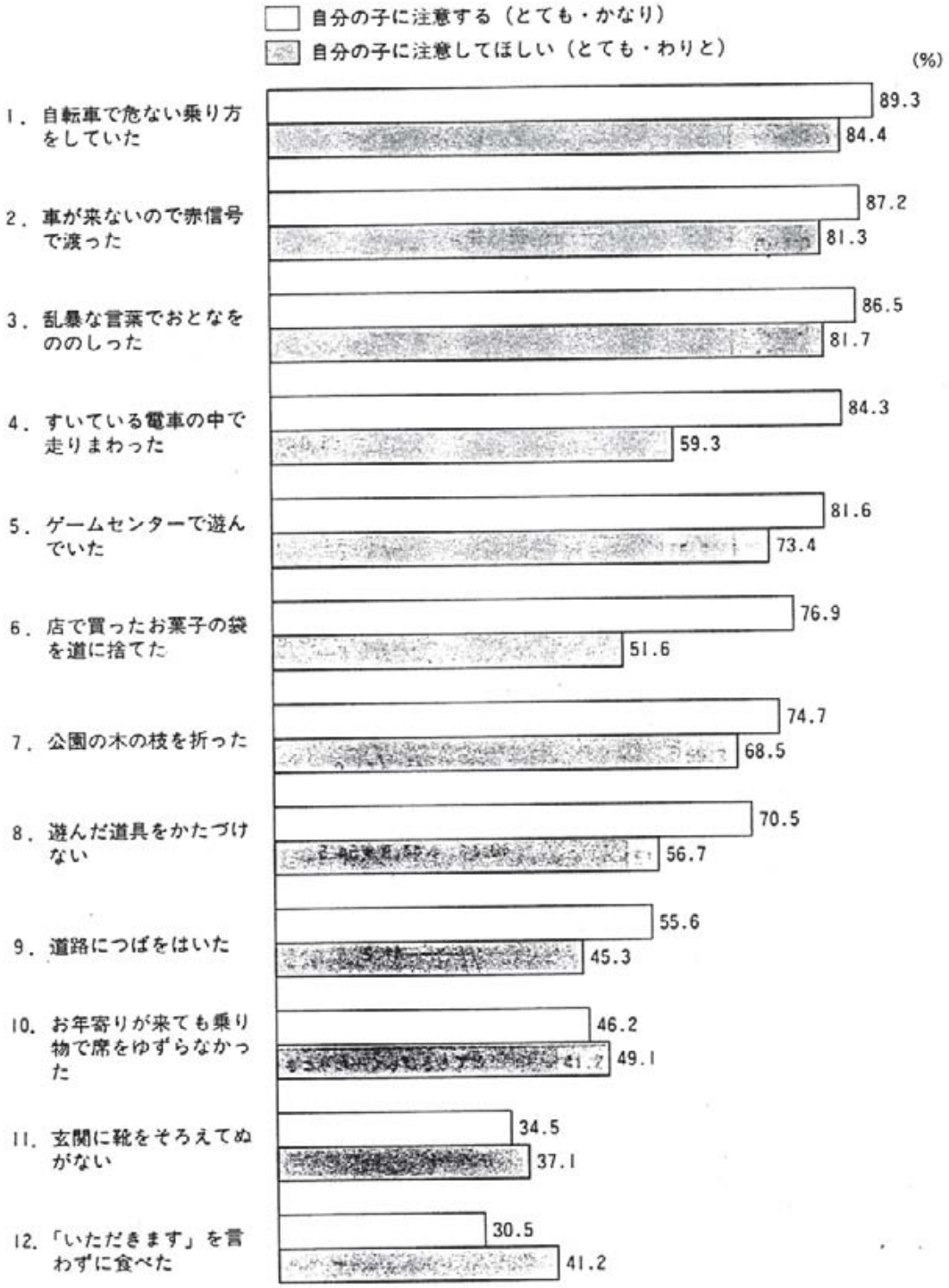


図27　自分の子どもを注意してほしいときとその程度×地域

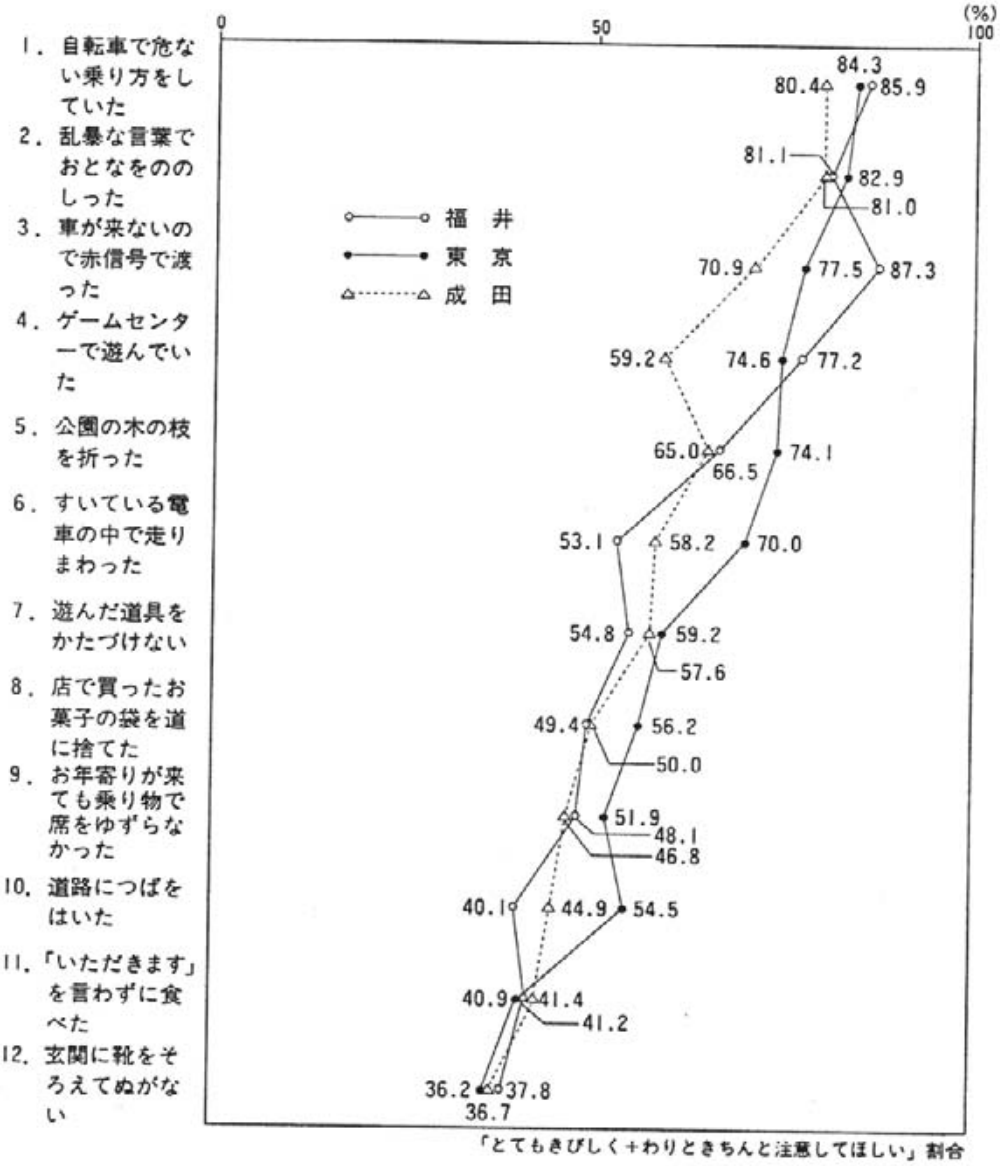


図28　他人の子への注意と他人からしてほしい注意

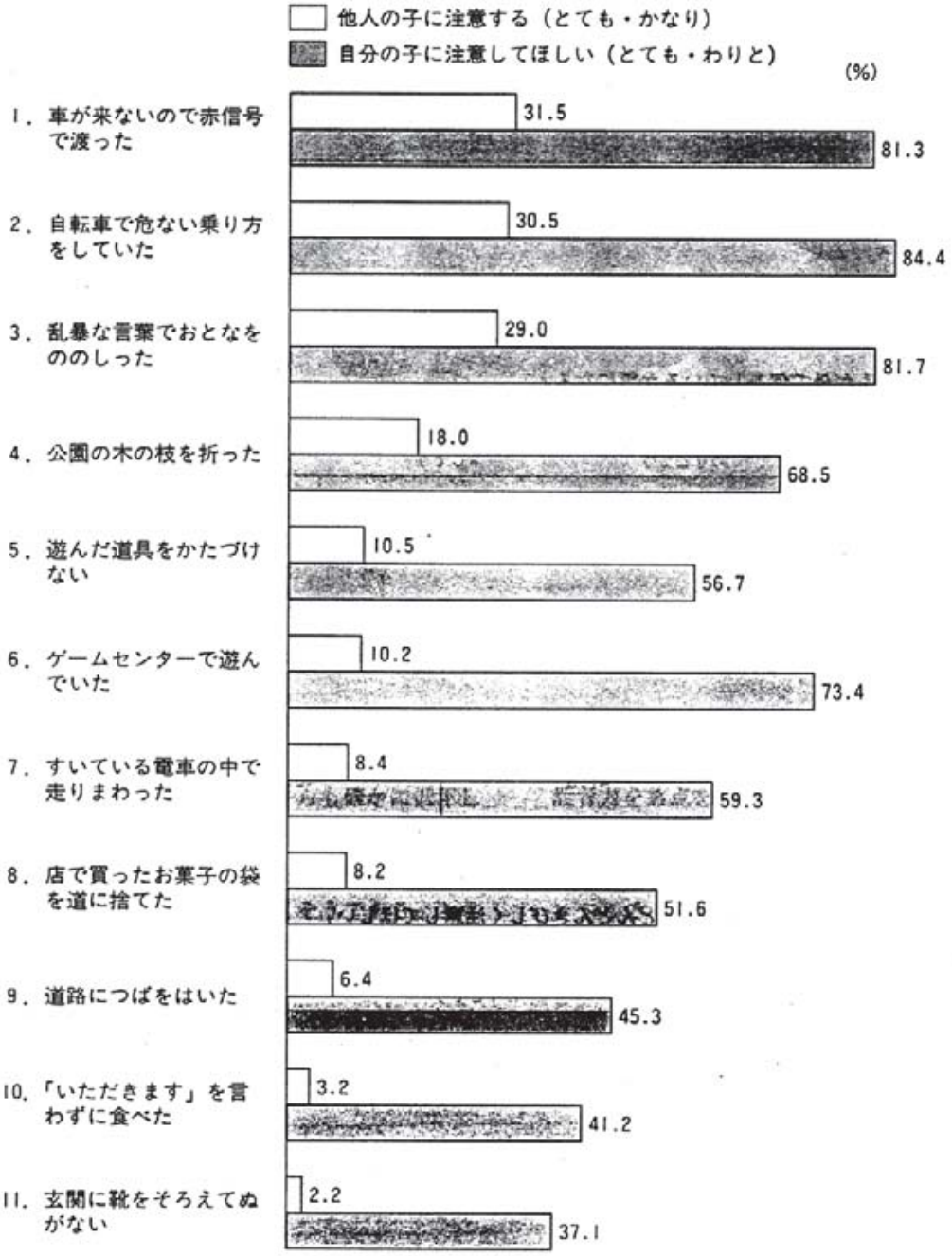


図29　地域としつけ

「自分の子でなくても、地域の人全員でしつけるようにしたい」

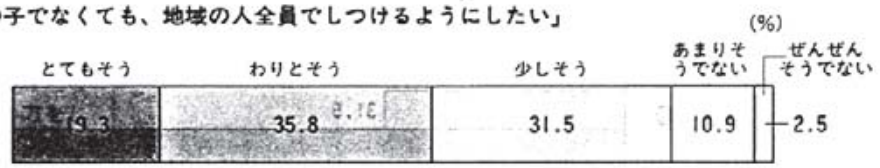
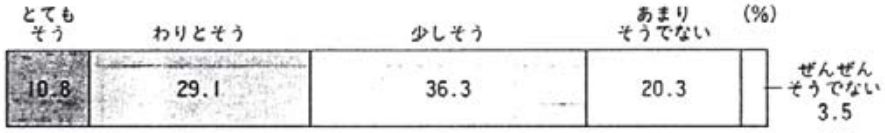
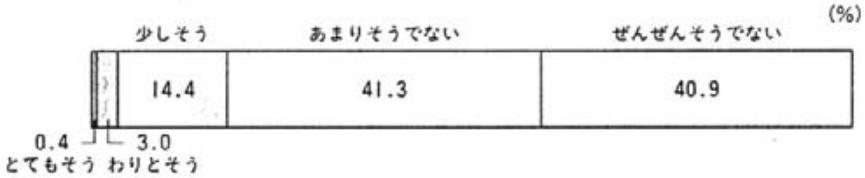


図30　わが子への関わり

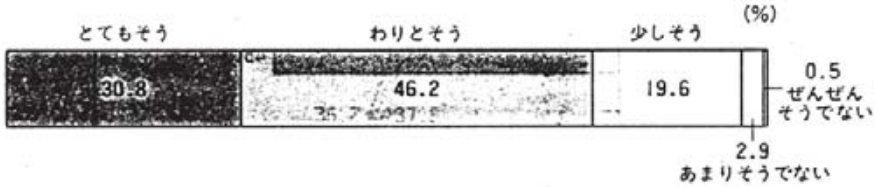
①「子どもが外で何をしているか気になる」



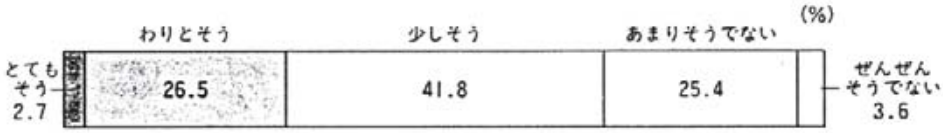
②「いけないことをしているとわかっていても、自分の子に注意しない場合がある」



③「自分の子が悪いときには、どんどんきびしく注意してほしい」



④「他人の子が悪いことをしていても、よほどひどくなければ黙って通り過ぎてしまう」



3．学校のあり方をめぐって

子どもに対する「地域の教育力」は、以上見てきたいくつかの資料からも確かに低下していることがわかる。そしてこの先、その回復への努力が期待されるものの、当分は現状を大きく変えることは難しそうである。とすれば、われわれはしばらくの間、学校にその失われた部分の教育力を補う役割を期待せざるを得ないだろう。そのためには、しつけをも含め人びとからの過重な期待に悩む現代の学校の負担をできる限り減らし、学校のもつ教育力を焦点を定めつつ増加させる方向を望むことが必要となる。そのためには行政と親とが、学校をどう支援してゆくか、具体的なレベルで考えてゆくことが必要になろう。

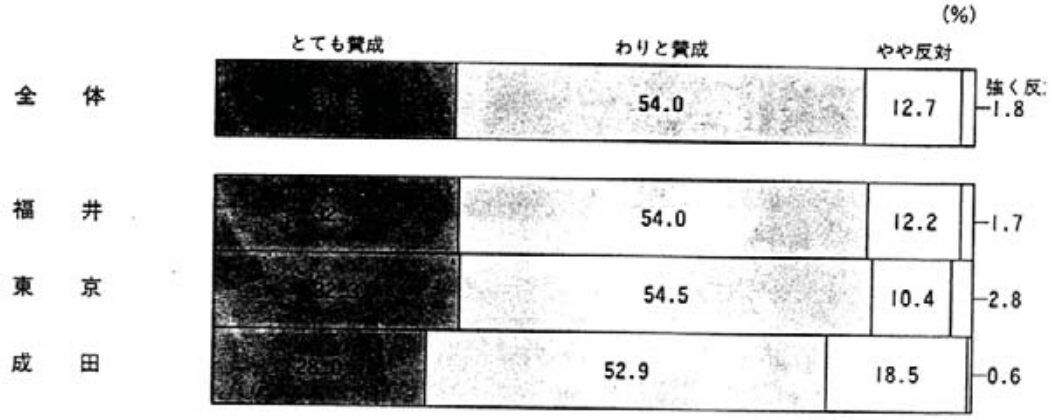
ここでは学校５日制をはじめいくつかの今日的教育課題をとり上げて、母親たちにその意見を聞いてみた結果を示し、本レポートのしめくくりとしたい。

遊びの回復のために

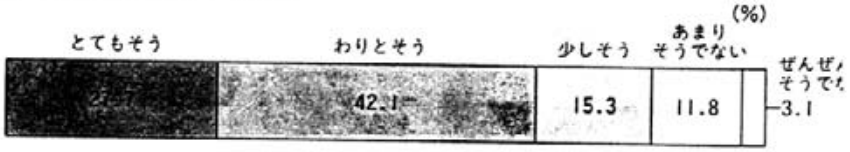
地域の中での遊び場が減り、子どもの自由時間と仲間の数が減ったことと相まって、子どもたちが集団で自由に遊ぶ姿を目にする機会が減った。遊びは本来、子どもにとって大きな成長要素を含む活動である。その中で、自主性や自発性を生み出し、社会性を育て情緒を安定させる。そして体を作り運動能力を高める。こうした遊びのもつ教育力ははかり知れないものがあり、地域の教育力の中でも仲間との遊びのもつ教育力は重要なウエイト

図31　母親の意見

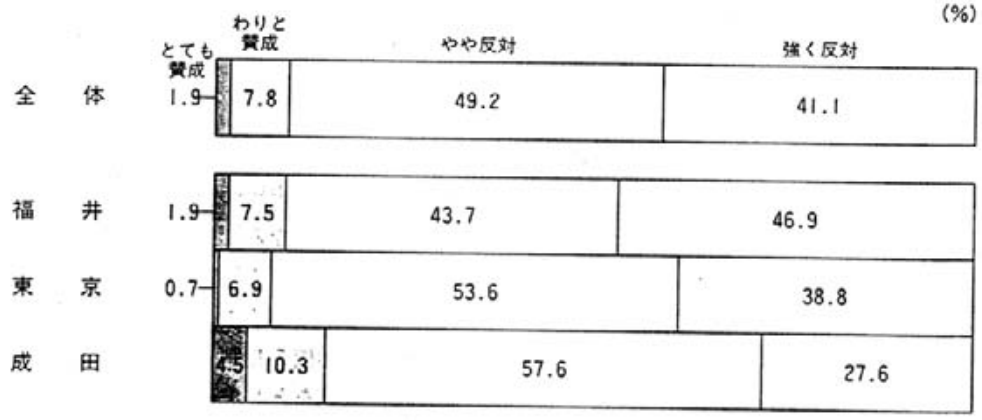
① 始業前に1時間遊ぶことについて



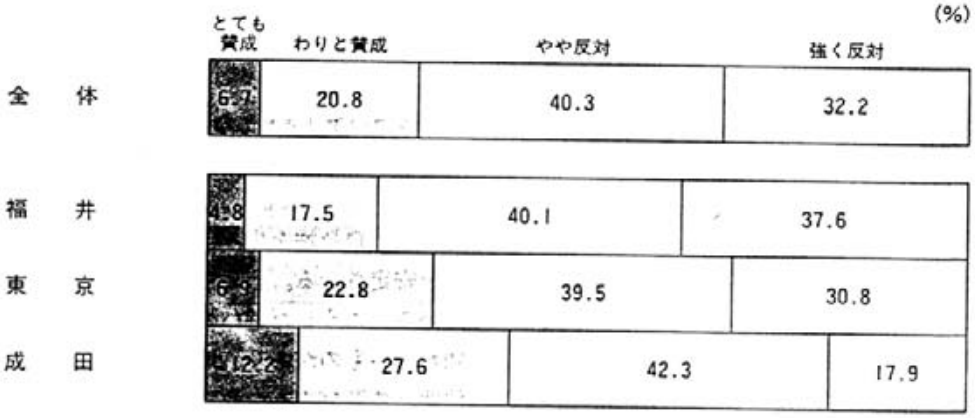
②「勉強は学校で、しつけは家庭で行うべきだ」



③ 校舎の掃除を業者にまかせることについて



④ 給食と弁当の選択が自由なことについて



を占めていたと考えられる。その仲間遊びを復活させるための「場」と「仲間」とはとりあえず学校に期待できるのではないかという意見をもつ人びとは多い。いま40代以上の人びとは少年時代、朝1時間もそれ以上も早く登校して仲間と遊んだ経験をもっている。そこでケガをしたらどうする、とか、犯罪にあったら——などと、親も子も考えなかったのんびりした時代の話ではあるが。

現代では昔と違って種々の管理上の制約もあるとは思うが、とりあえず1つの方法ではある。この点を聞いてみたのが図31である。図が示すように親たちの賛成は圧倒的であり、全体の86%が賛成している。その実現のための方策が行政サイドで探れないものだろうか。

学校の手をもっと自由に

日本の学校の先生方は忙し過ぎると言われる。先生方の熱心さのゆえに多くの仕事をかかえ込み過ぎるという見方もできるし、また親や社会が「何でも先生にやってほしい」と身勝手と甘えと無責任（親の果たす役割を果たさず学校に依存する）さを混合した形で期待をよせる結果という見方もできる。むろん学校と家庭の役割分担の必要性は親も自覚していて、たずねれば図31－②のような意見が返ってくる。ここで賛成する母親は85%にも達している。しかしそれが単なるたてまえだけだということは、誰でも知っている。本音を聞き出せば、次のようになるのである。

図31－③校内の掃除を子どもでなく業者にまかせることに対する意見である。アメリカやヨーロッパでは伝統的に校舎の清掃はクリーニング業者が行う。しかし家庭で小さい頃から室内を汚さないしつけ、とくにじゅうたんを汚さないしつけを受けている子どもは、日本の子どもよりずっと教室や廊下を汚さぬように配慮しながら生活している。

日本の場合は子どもに①掃除技術を教える、②環境を汚さない配慮を育てる、のたぶん2つの目的があって、伝統的に掃除当番が置かれてきたのだろう。しかし掃除のしかたを教えるのは本来家庭教育の一環ではなかろうか。そして「環境を汚さない配慮」は全く成果が上がっていないことを、誰しも知っている。これはむろん、家庭での基本的しつけの中に含まれることなのだ。

しかしこの点を母親にたずねると、図が示すように全体で賛成者は1割に過ぎず、強く反対する者が4割を超える。反対者は面白いことに福井が47%と最大で、東京は39%、成田は28%という差がある。成田の親たちは在外経験をもつ者が多く、その点でこうした軟らかい意見になるのであろう。母親たちのこの声を見ると、担任は当分の間掃除までを「指導」し「監督」もしなければならない状況が続くであろう。業者にまかせることで、校舎は一層きれいになり、子どもの美意識（環境はきれいで整頓されている状態が気持ちがよい）は高められ、教師は手の空いた分をもっと子どもと遊んだり、教科の個人的指導をしたりができるとも考えられるのだが。

もう一つ④は、「家庭のその日の都合で給食と弁当の選択を自由にするのが世界の国々の特徴だが、どう思うか」についての結果である。全体としては賛成が28%で、反対が73%と圧倒的である。給食廃止論と違って「選択」ができるのに、なぜこうも反対が多いのか理解に苦しむところである。これは、1つは親の権利や都合をできる限り保障しようとする精神であり、子どもの好みを尊重しようとする点で個を大切にしようとする態度にもつながっている。しかしこうした精神や態度は日本社会の中では、現在少数派に過ぎないようである。なお地域差を見ると、ここでも反対

は福井（78%）が最大で、次いで東京（70%）、最後がニュータウンの成田（60%）となっているのは面白い。こうした風土の中での学校の改革は、何かと難しい問題であろう。

学校5日制をどう思うか

企業や官庁の週休2日制が次第に定着しつつある中で、学校をも5日制にしたらという動きが出てきており、とりあえず検討段階に入りつつある。世論の上でも子どもたちにとってのメリットとデメリットの両方の声がある。

図32は、まず5日制の賛否を図にしたものである。反対は「とても・わりと・少し」を合わせて71%と多数を占め、その中でも「とても・わりと反対」という積極的反対派は5割を上回る。図32－②の結果も「子どもにとってよいことではない」が68%に達する。

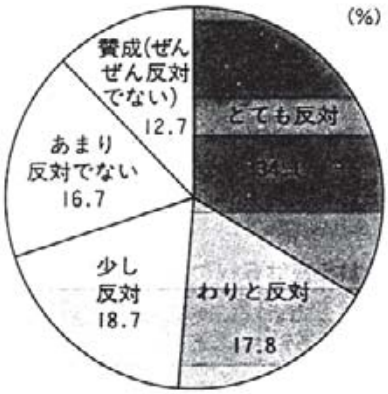
ここでも地域差は同じ傾向で、反対派は福井が82%、東京61%、成田ニュータウンでは最小で54%となっている。

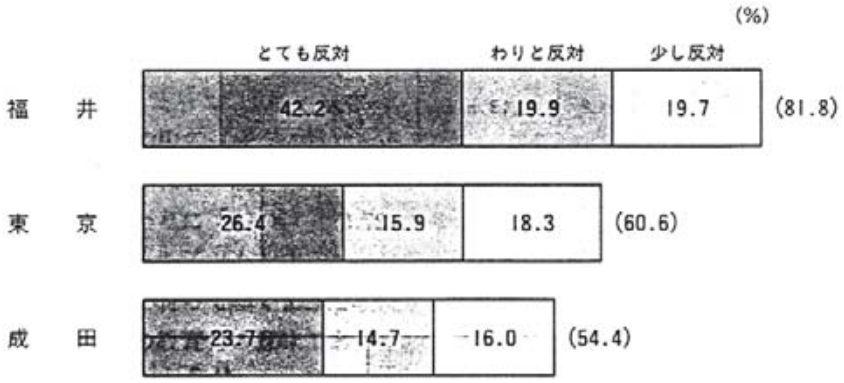
さてその賛成反対の背景だが、メリットとデメリットに分けて考えると図32－③のようになる。「塾がますますはやる」（87%）、「学校へ半日行かない分、かえってつめ込み勉強をさせることになる」（69%）が、「子どもがひまになり」（63%）、「よく遊ぶようになる」（71%）とも考えられている。問題はよく遊ぶことを子どもの成長体験として捉える感覚があるかどうかだろう。しかしこれにくらべると、「家族とのふれ合いの時間がふえる」（55%）、「ピアノ・サッカーなどやりたいことを伸ばせる」（49%）ことにはやや数値が低い。つまりメリットより塾がはやってますます勉強がきびしくなることのほうを、母親たちは案じている気配である。

確かに現状のまま学校5日制に踏み切るのでは、母親たちの心配が現実化する可能性も否定できないだろう。5日制になったときに新しく加わるもう一日の休日は、これまでの日曜日のように家庭で過ごさせるのでなく、「地域」の日、地域に戻す一日でなければ意味がないだろう。しかもその「地域」は、十分に温かくそして人間的で、子どもの成長にとって十分な教育力をもった「地域」でなければならない。学校5日制の受け皿として地域が十分な教育力をもつ場であれば、誰が考えても学校5日制はいい試みに違いないのである。そのためにも、地域の教育力を高めるための具体的な方策が探られるべきであろう。

図32　母親の意見

①「学校5日制に反対か」





②「学校5日制は子どもにとって」

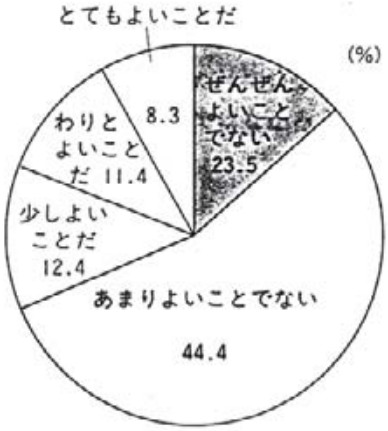
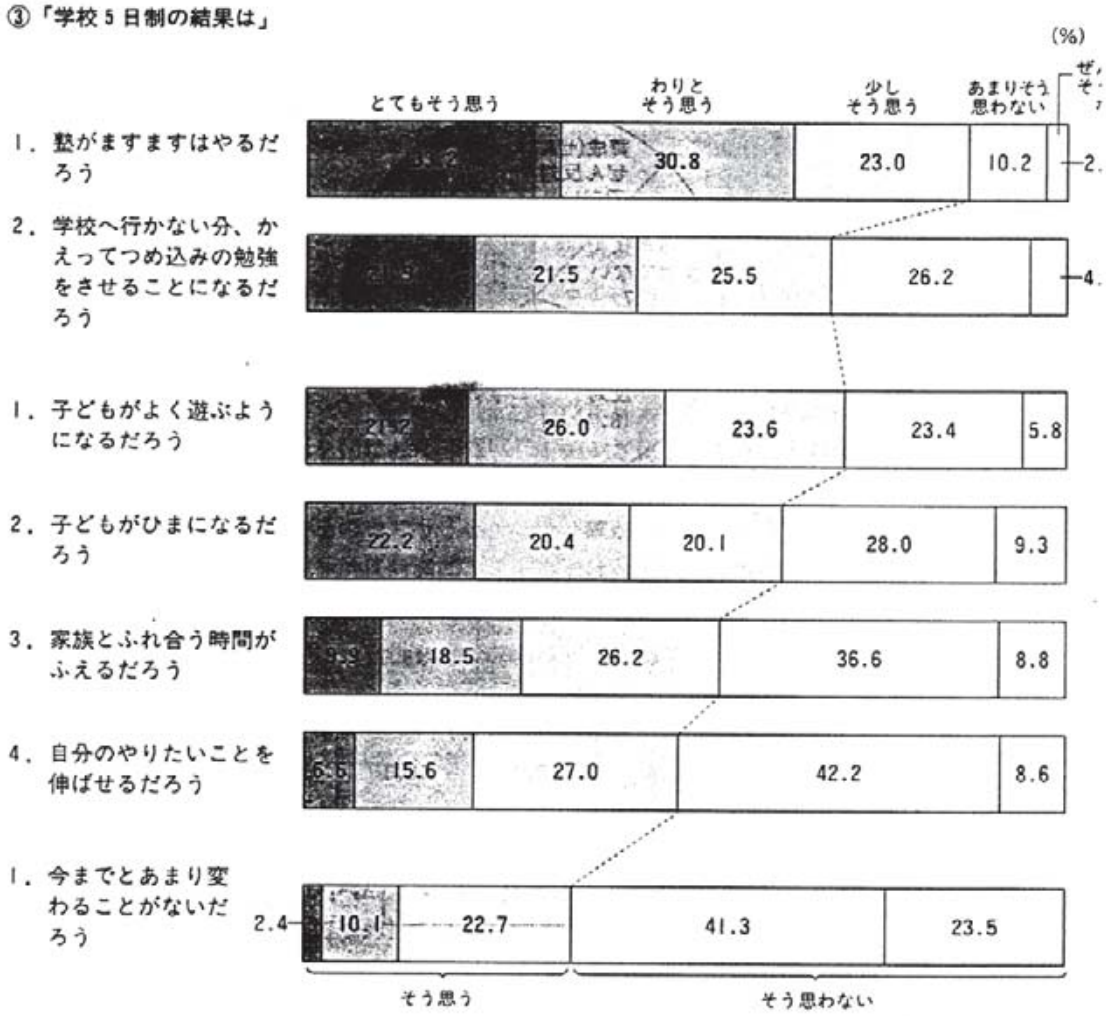


図32　母親の意見

③「学校５日制の結果は」



まとめ

地域の教育力が十分に整えられている状態とは

①地域に子どもの遊び場（自然環境、もしくは作られた遊び場としての公園など）が数多くあり、そしてできれば文化施設や教育施設があり、また子どもの成長に有害なおとなの遊び場(盛り場など)がない環境になっていること

②地域に種々の生活行事があり、おとながそれを支え、子どもぐるみで参加することで、地域が人びとの温かい交流の場となっていること

③地域の中で（家庭の外で）子どもの遊ぶ姿、生活する姿があり、人びとがそれを「親」のもつまなざしに近い温かい目で見まもり、時に親代わりに「しつけ」をもしてゆこうとする態度があること

④すなわち子どもが家庭の中に親をもつだけでなくて、地域全体を親として育ってゆくような状況があること

が、地域の教育力の意味であろう。

しかしこのレポートで見てきたように、地域によってそれぞれ特色はあるが、子どもの成長にとってまあまあの施設や環境はあっても、その地域に住むおとなたちの中に、もう一つ自分が地域の住民として、積極的に他の子どもの親代わりをもつとめようとする意識や努力に欠けているように思われる。親の目はいつも自分の子だけに向けられており、他に期待するだけで自分もまた地域の教育力の一部だという意識を欠いているのではなかろうか。